2012

東京都現代美術館研究紀要

田中未知・高松次郎の言語楽器《パロール・シンガー》と関係資料について

吉﨑和彦

はじめに

東京都現代美術館で開催した「東京アートミーティング［第3回］アートと音楽－新たな共感覚をもとめて」展（会期：2012年10月27日～2013年2月3日）において、作曲家の田中未知（1945-）が考案し、美術家の高松次郎（1936-1998）が外観をデザインした言語楽器《パロール・シンガー》が展示された。本作品の一般公開は1974年の田中の個展「言語楽器―あらゆるコトバが音楽に―」展（会場：ゼロックス ナレッジ・イン）で初めて発表されて以来のことであり、実に38年ぶりの公開となった。

展覧会では作品とともに、高松による設計図面やドローイング、「言語楽器」展の関連イベントを企画した詩人で劇作家の寺山修司（1935-1983）の自筆原稿、そして「言語楽器」展のポスターとチラシ等が関連資料として展示された。《パロール・シンガー》については、高松次郎のドローイング一点が作品集『高松次郎 All Drawings』[註1]に所収されている程度で、本作品について知ることのできる資料は限られていたが、これらの資料が田中未知自身によって提供されたことにより、《パロール・シンガー》の詳細が判明し、さらに田中や高松以外にも、詩人、グラフィックデザイナー、ピアニストなど多くの異なる領域のアーティストや専門家たちが作品制作や展覧会に関与していた実態が見えてきた。

田中未知・高松次郎 言語楽器《パロール・シンガー》1974年 撮影：上野則宏

本稿は、上記資料群と作品制作者である田中未知本人の証言をもとに言語楽器《パロール・シンガー》の概要をまとめたものである。さらに、田中より2013年1月29日に電子メールにて「言語楽器の誕生」と題された手記を頂戴した。作者自身の言葉で綴られた言語楽器のコンセプトとその制作経緯は大変貴重なものであるため、ここでその全文を紹介する。

1　言語楽器《パロール・シンガー》の概要および仕様について

言語楽器《パロール・シンガー》は、田中未知によって考案され、高松次郎が楽器本体および椅子の造形デザインを担当した。

田中は、寺山修司の秘書兼マネージャーとして16年間その仕事を支えつづけた。寺山主宰の演劇実験室「天井桟敷」においては、制作と照明も担当している。一方で、1968年カルメン・マキの「時には母のない子のように」の作曲（作詞は寺山修司）で知られるように作曲家としても活動している。

高松次郎は、「天井桟敷」の第10回公演「ガリガリ博士の犯罪」（1970年）の美術を担当し、市街劇「人力飛行機ソロモン・ヨーロッパ篇」（1971年）においては台本の一部を書くなど劇団とは交流があり、その中で田中とも出会い、この《パロール・シンガー》の話が持ち上がったという[註2]。 そこに「天井桟敷」で舞台装置の工作および設計を担当していた河田悠三（1947-）が技術進行として加わる。そして、田中の構想と高松のデザインを実際の楽器として製造したのが、コロムビア音響工業である。

言語楽器《パロール・シンガー》とは、「表記文字―エクリチュール―を、音に翻訳する機械であり自動作曲機械でもある。あらゆる言語、文字に個別の「音」を与え、すべての書物を演奏し、同時に、すべての楽曲を文字化して記述できる機能を持っている。言語楽器によって音声言語―パロール―を複写し、楽曲するための試み」[註3]である。

ライトグレーを基調とした《パロール・シンガー》の楽器本体と椅子の側面は、それぞれ美しい流線型をしており、二つを並べたときに上向きの半弧を描くのが大きな特徴である。作品の構想段階で、このデザインがどのような過程を経て生まれてきたかについては、高松のドローイングにデザインの構想過程を

見ることができる（図1〜6）。

《パロール・シンガー》の楽器としての構造はピアノや電子オルガンに近く、音色も類似している。しかし、ピアノのような鍵盤はなく、その代わりに、タイプライターのようなキーボタンで構成される「文字盤」と、その文字が表示される「電光盤」を有している。「文字盤」のキーを一字ずつたたくと、その文字に割り当てられた音がスピーカーから流れると同時に、その文字が「電光盤」に点灯する仕組みになっている。

さらに《パロール・シンガー》には、音色の切り替えやトレモロ、メトロノームといった機能がついている。電光盤の下にスイッチやつまみが並んでいるが、ここでこうした機能の切り替えや調節を行うことができる（図17参照）。また、この中には外付けスピーカー用のスイッチがあるが、田中本人の言によれば、当初、本体同様高松によってデザインされた外付けのスピーカーが4台あったそうだが、現在その所在は不明である。

2　文字と音の構成について

《パロール・シンガー》の「文字盤」は、64種類のカタカナおよび記号から構成されている（図16参照）。これは、カタカナの㋐から㋝までの46音語（㋖は㋗に置換）に、濁点と半濁点や㋚㋛㋜などの小文字、㋐゛㋑゛㋒゛㋓゛や㋐゜㋑゜㋒゜㋓゜、㋛゛といった日常会話ではほとんど発音しない言葉までもが選ばれている。こうした言葉の選択は、「日本語の話し言葉の使用率順」や「発音しにくいことばアンケート子音連続表」などが参考にされた[註4]。なお、濁音や半濁音といったそれだけでは音として成立しない記号の場合、演奏の際には、その基本となる文字と濁点キーあるいは半濁点キーを同時に押す。例えば、「だ」であれば、㋙と◯゛の二つの文字ボタンを同時に押す。つまり、和音として演奏される。小文字の㋚㋛㋜も同様に基本となる文字と同時に押す。一方、句読点や鍵括弧は「文字盤」にないため、休符記号として扱われ、その休む長さは演奏者自身によって決定される。

《パロール・シンガー》の1オクターブは32音階から構成される。これは、現在最も広く普及している平均律がもつ限界から脱却し、音の可能性を解放するための試みであった。1オクターブを12音階に等分割した平均律は、調律をすることなく自由に転調できる。しかし、その代償として和音の響きの美しさを犠牲にしているという側面があり、そのことがこの音律の限界といえる。

そこで田中は、音の振動数の共鳴度が高いほど音が美しく聞こえるという原理に従い、独自の法則を生み出して32音階を導きだした[註5]。そこに、前述した64種類の1音語に1音階ずつ組み合わせていったのである。文字と音の組みあわせ方については、例えば、使用頻度の高い文字と音階の共鳴度数が高いものを組み合わせる一方で、発音しにくい文字には共鳴度数の低い音階を組み合わせるといったようになっている。

3　「言語楽器―あらゆるコトバが音楽に―」展について

《パロール・シンガー》が発表された田中未知の個展「言語楽器―あらゆるコトバが音楽に―」展は1974年5月2日から6月30日まで、銀座ソニービル4階にあった「ゼロックス ナレッジ・イン」で開催された（図38参照）。

本展覧会において特筆すべき点は、毎週日曜日にゲスト演奏者が招かれ、《パロール・シンガー》を実演するイベントが開催されたことである。詩人の谷川俊太郎（1931-）、ピアニストの高橋アキ（1944-）、「天井桟敷」のメンバーでもあった映像作家の萩原朔美（1946-）、作曲家の林光（1931-2012）、童話作家の立原えりか（1937-）、そしてピアニストの深町純（1946-2010）という活動領域が異なるアーティストたちが多数参加している。本イベントを企画したのは寺山であり、詩や演劇にとどまらない多岐にわたる活動から築かれた寺山の人脈が、こうしたゲスト招聘に反映していると考えられる。しかし、残念なことにこのイベントの記録や音源は残っておらず、演目内容等詳細は、現在のところわかってはいない。

展覧会の内容については、寺山が「言語楽器」展の構想を綴った自筆原稿（図19〜37）から窺い知ることができるが、これはあくまで構想段階の原稿であり、すべてが実現されたわけではない。この原稿は鉛筆で書かれた原稿用紙20頁から構成されているが、田中の言によれば、図36の3行目までが寺山の自筆によるものである。用紙の右下にはすべて「寺山修司」と印刷されている。内容は、《パロール・シンガー》と、同じく本展に出品された《ヴォイス氏の部屋》に関する紹介文、そして展覧会のプログラム構成である。そこでは、「ホスト」と「ホステス」と呼ばれる解説員が来場者に対して作品の実演と解説を行う時刻や方法などが詳細に記されている。また毎週日曜日のゲスト演奏者に関しても、前述した6人に加え、「プレミアゲスト」としてアニメーション作家の久里洋二や作曲家山本直純と二人の名前が挙がっているが、実現はされなかったようである[註6]。

展覧会のポスターとチラシは、杉浦康平（1932-）によるデザインである。ポスターは蛍光オレンジと蛍光黄緑の二種類の色があり、この二対のポスターは図柄と記載内容の一部が異なる。チラシにはこの二種類のポスターの図柄と文字情報が片面ずつ印刷されている。チラシはB3サイズだが、いわゆる折り紙の「紙鉄砲」の形に折られており、その状態でチラシを手にもって力強く振ると「ぱんっ」という音が鳴る仕掛けとなっている（図39〜43）。このようにチラシ自体が一つの楽器として機能するデザインとなっている点は興味深い。

4　修復について

最後に「アートと音楽」展出品にあたり実施した修復について触れておきたい。《パロール・シンガー》は1974年の展覧会以降、東京都港区三田にある願海寺に長く保管され、その後田中

未知の親族の家で保管されていた。「アートと音楽」展出品の前に作品を調査した際に、作品の素材の経年変化と汚れ、機械部の動作不良が見つかったため、田中と協議しながら専門家による修復を行った。楽器の表面の洗浄は修復家の斎藤敦氏に、楽器の機械部の修復は田中信至氏に、それぞれ依頼した。

本体および椅子表面には黄変が目立ったため、エタノールによる表面の洗浄処置を行った。一方、楽器内部に関しては、トレモロのスイッチの結線が誤った回路と接続していたことにより作動不良を起こしていたが、仕様書（図18）記載通りの接続に修正したことにより復旧した。また、電子回路上の部品についても、劣化が見られた箇所については部品を交換した。その他、文字ボタンの回転防止のために軸棒に巻きつけられているピアノ線が一部断線、あるいは経年変化により劣化、そして本体内部にある鍵盤が電光盤の電気のスイッチに接触する箇所に貼られているフェルトも劣化していたため、それぞれ新規のものと交換した。

結び

今回紹介した資料により、言語楽器《パロール・シンガー》の詳細に加えて、本作品が楽器としての革新性をもつばかりか、田中や高松をはじめとして、寺山や杉浦など異なる分野で活動する同時代のアーティストや専門家たちが多く関与していた実態が見えてきた。このことは本作品が1970年代におけるジャンル横断の試みを検証する上で非常に重要な作例であることを示している。しかし一方で、その越境性がゆえにどのジャンルにも回収しえず、さらに資料が少なく情報が限られていたために、これまで詳細かつ実証的に論じられてこなかった。それだけに、今回、作品とともに発掘された資料は、作品の全景を詳細に伝えるもので非常に貴重なものである。本作品は、音楽という一つのジャンルにとどまらず、美術、文学、そして言語学などその他の領域も射程に入れてあらためてその意義が問われるべきである。これらの資料をもとに、1970年代の時代状況をふまえながら、《パロール・シンガー》を領域横断的かつ協働的な実践の歴史の中にどう位置づけていくかは今後の課題とする。

（付記）本稿を成すにあたり、田中未知氏に多大な御協力、御教示をいただいた。ここに記して心から感謝の意を表します。

註

1. 高松次郎作、ユミコチバアソシエイツ編『高松次郎 All Drawings』、大和プレス、2009年、p.129、作品番号850。本書に掲載されている《パロール・シンガー》のドローイングが最終形に近い。
2. 田中未知の証言による。
3. 『田中未知作品カタログ』、質問舎、1977年、p.7
4. 註3に同じ。
5. 詳しくは本紀要に掲載の田中未知の手記「言語楽器の誕生」（p.91）を参照のこと。
6. 田中未知の証言による。

言語楽器《パロール・シンガー》関係資料1

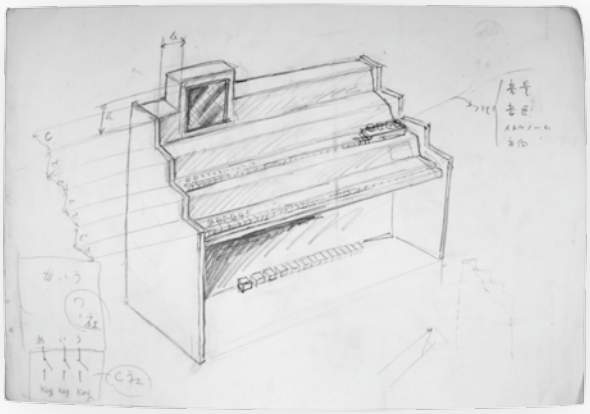


図1　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》1

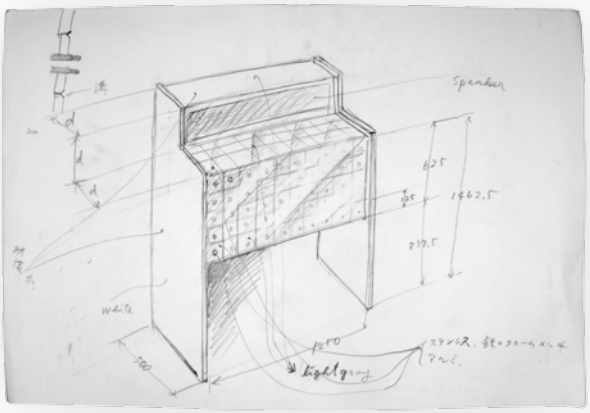


図2　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》2

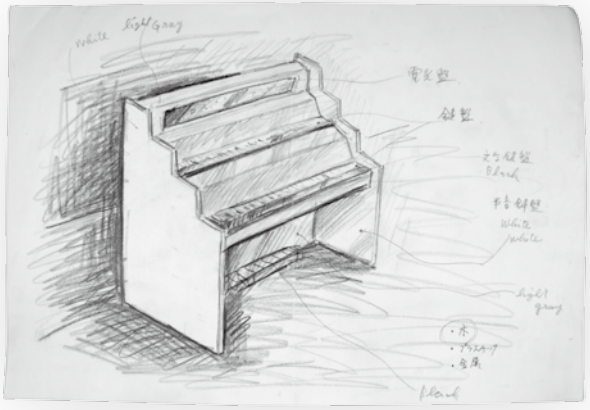


図3　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》3

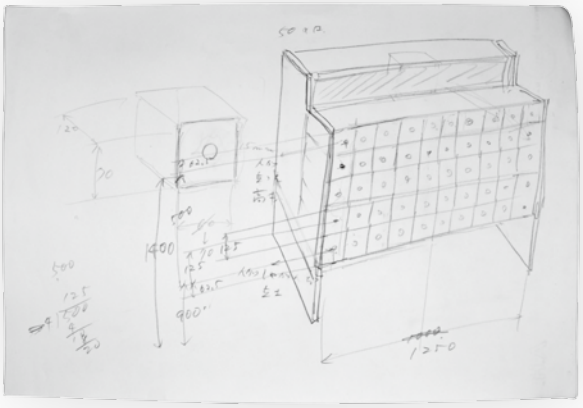


図4　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》4

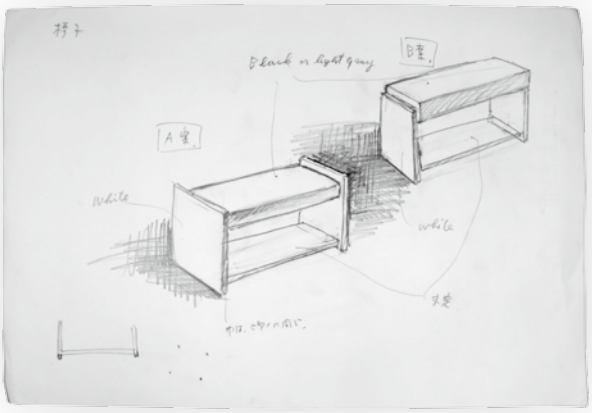


図5　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》5

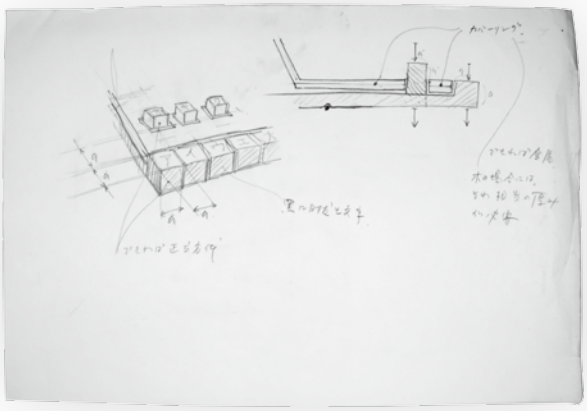


図6　高松次郎《「パロール・シンガー」のためのドローイング》6

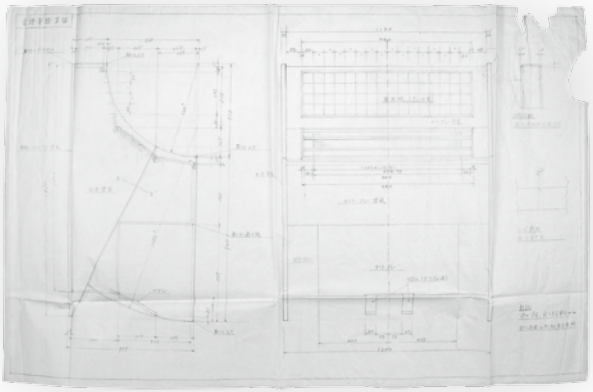


図7　言語楽器《パロール・シンガー》本体設計図

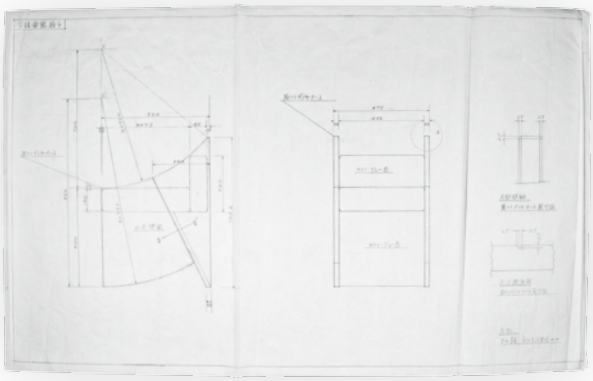


図8　椅子設計図

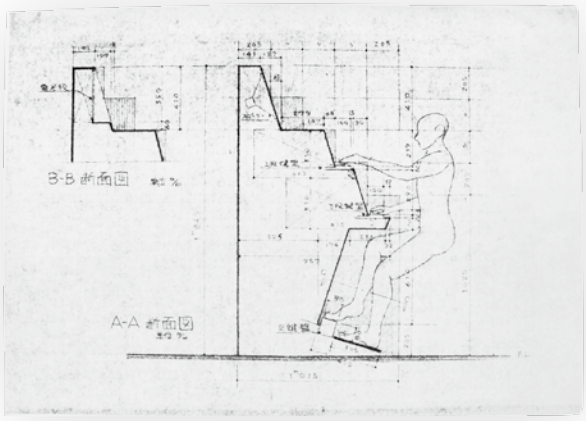


図9　断面図

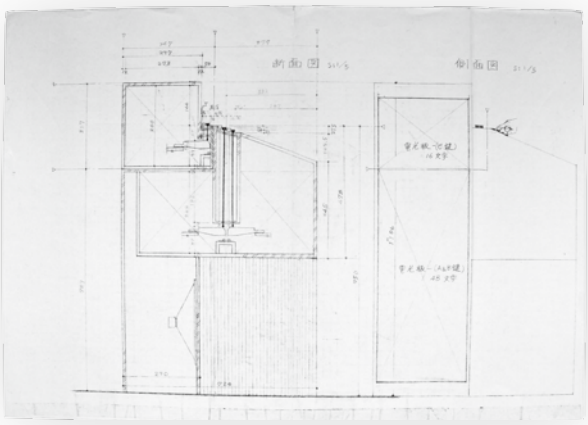


図10　側面図

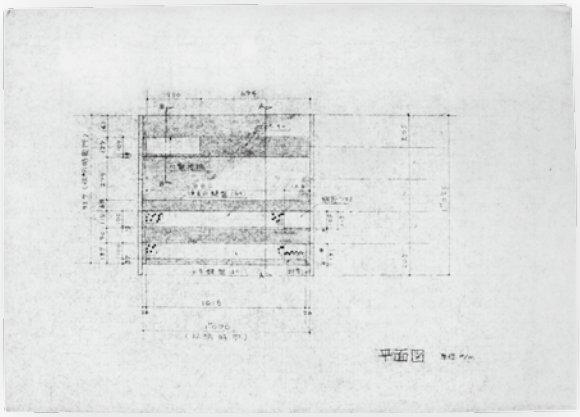


図11　平面図

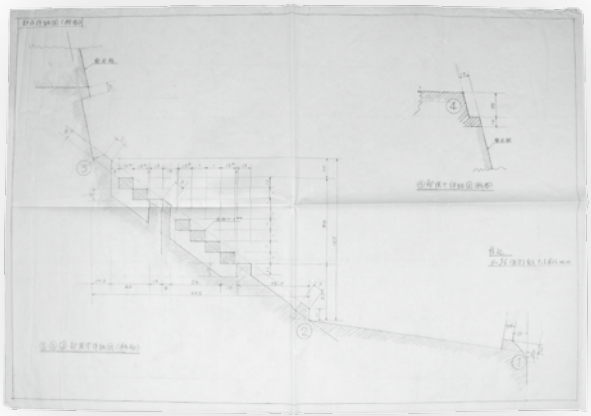


図12　部分詳細図（断面）

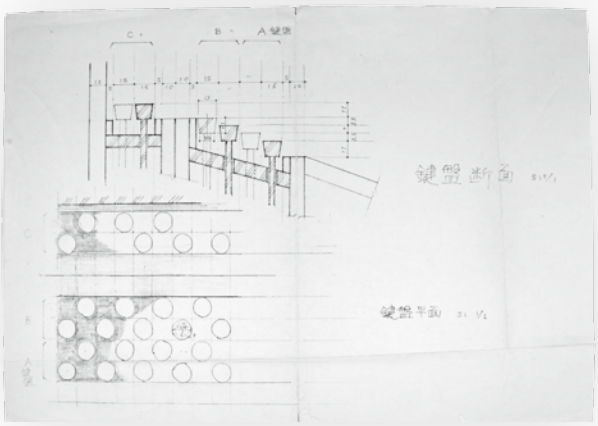


図13　鍵盤断面図および平面図1

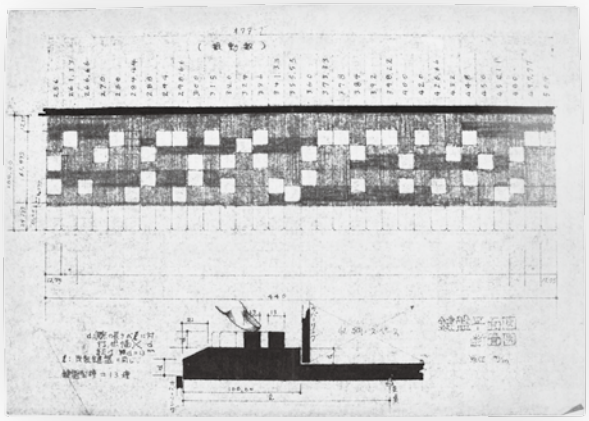


図14　鍵盤断面図および平面図2

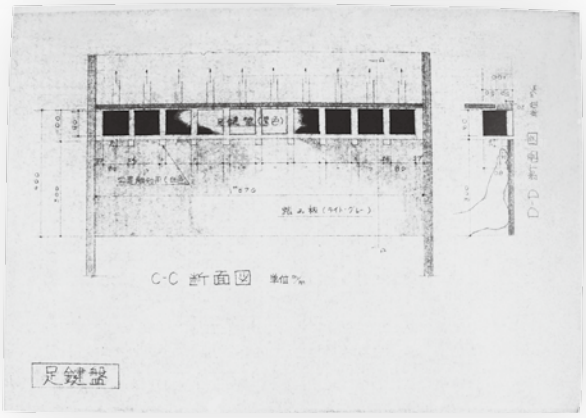


図15　足鍵盤断面図

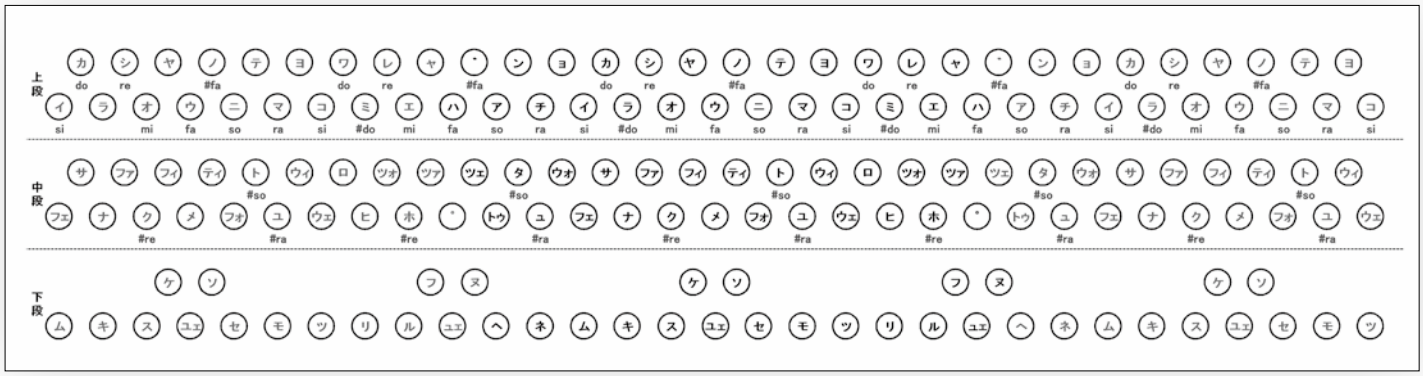


図16 「文字盤」のキー配列表（筆者作成）
文字盤は大きく分けて三段あり、各段二行ずつキーが並んでいる。
上段と中段は、左が低音で、右に移動するにつれて高音になっていくが、下段のみ、低音と高音の位置関係が逆転している。
なお今回、平均律の12音に近似する振動数のキーには、「ド～シ」を付した。これにより、《パロール・シンガー》で平均律の楽譜を演奏することが可能となる。

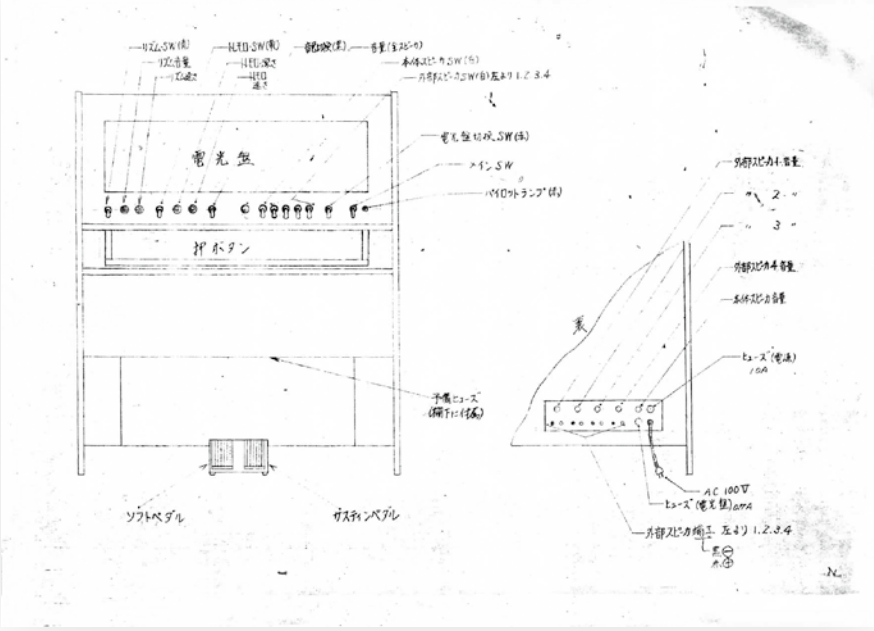


図17 仕様書「外観呼称説明図」

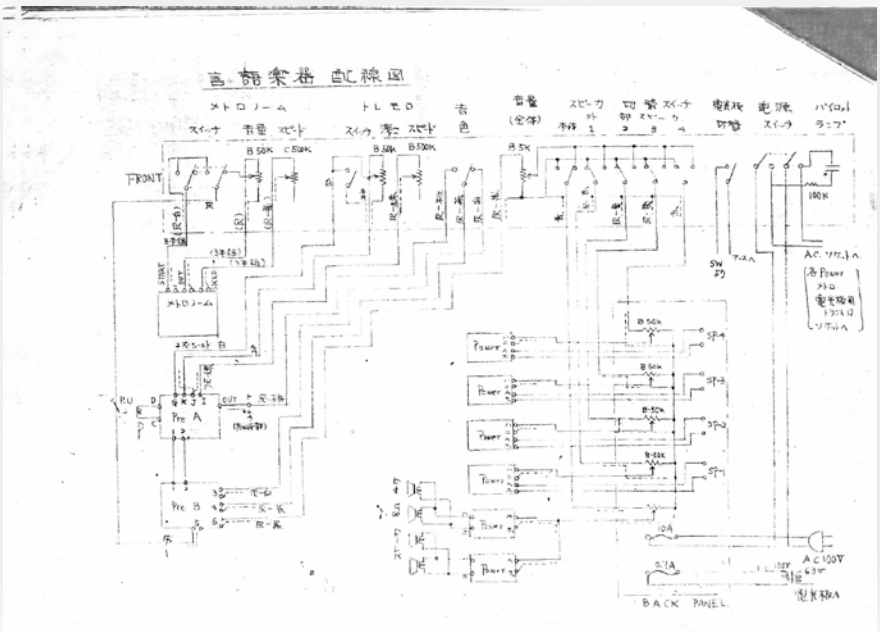


図18 仕様書「配線図」

図19　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》1

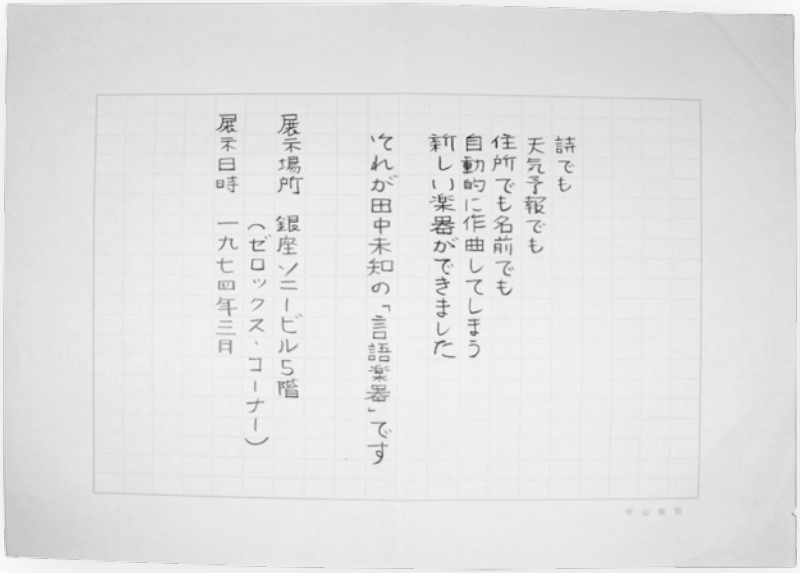


図20　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》2

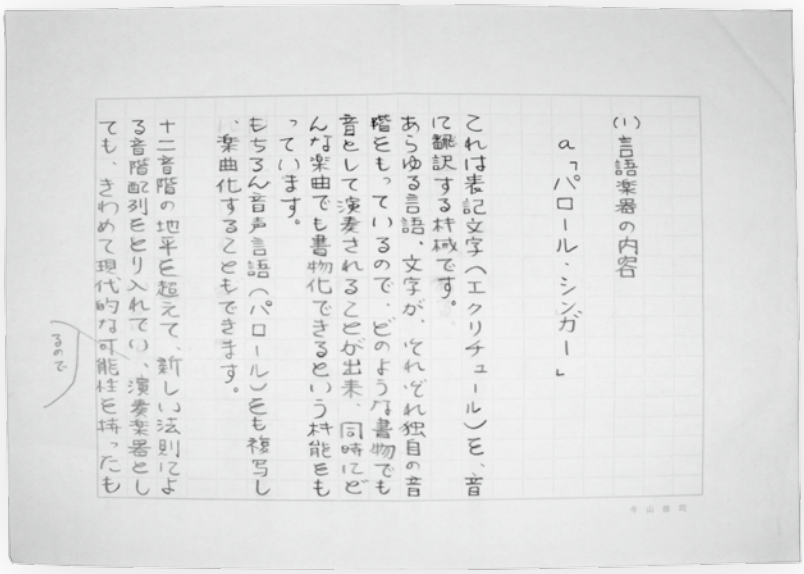
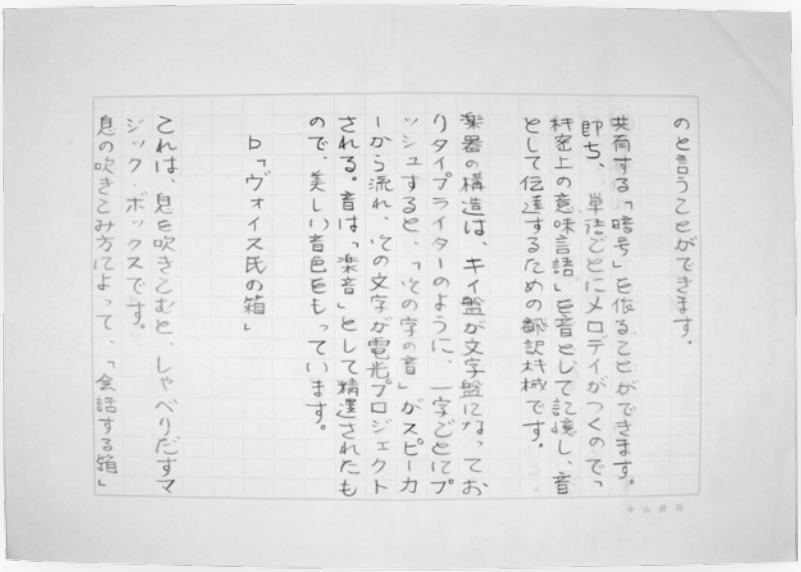


図21　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》3

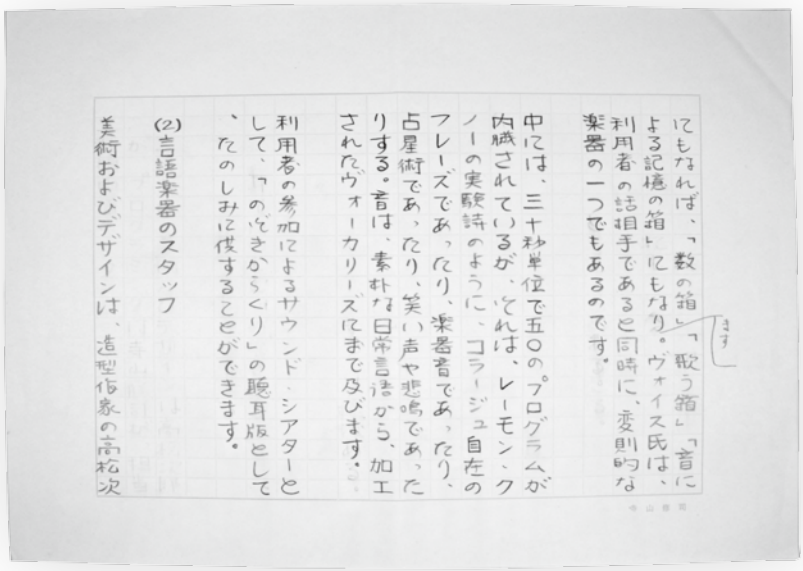


のと言うことができます。
共有する「暗号」と仮ることができます。
即ち、単語ごとにメロディがつくので、
秘密上の意味言語」を音として記憶し、音
として伝達するための翻訳機械です。
楽器の構造は、キイ盤が文字盤になって
おりタイプライターのように、一字ごとにプ
ッシュすると、「その字の音」がスピーカ
ーから流れ、その文字が電光プロジェクト
される。音は「楽音」として精選されたも
ので、美しい音色をもっています。

b「ヴォイス氏の箱」

これは、息を吹きこむと、しゃべりだすマ
ジック・ボックスです。
息の吹きこみ方によって、「会話する箱」

図22　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》4

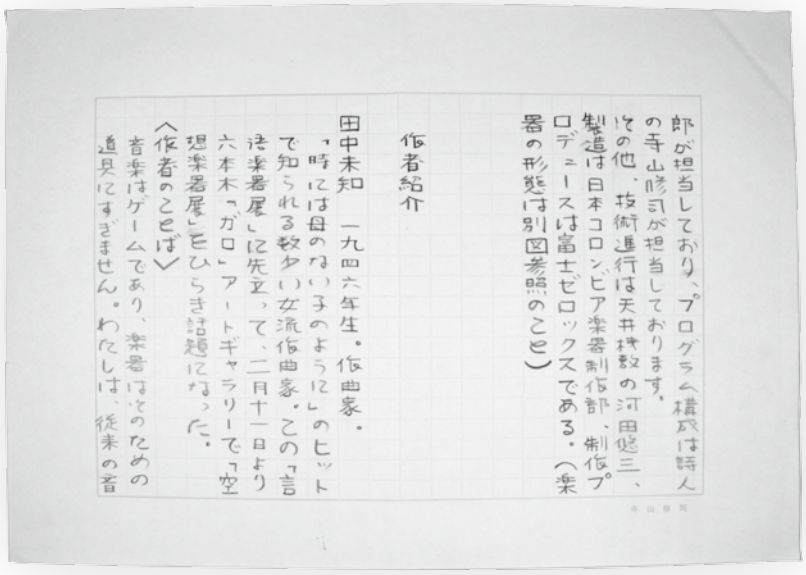


にもなれば、「数の箱」「歌う箱」「音に
よる記憶の箱」にもなり。ヴォイス氏は、
利用者の話相手であると同時に、変則的な
楽器の一つでもあるのです。
中には、三十秒単位で五〇のプログラムが
内蔵されているが、それは、レーモン・ク
ノーの実験詩のように、コラージュ自在の
フレーズであったり、楽器音であったり、
占星術であったり、笑い声や悲鳴であった
りする。音は、素朴な日常言語から、加工
されたヴォーカリーズにまで及びます。
利用者の参加によるサウンド・シアターと
して、「のびきからくり」の聴耳版として
、たのしみに供することができます。

(2)言語楽器のスタッフ

美術およびデザインは、造型作家の高松次

図23　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》5

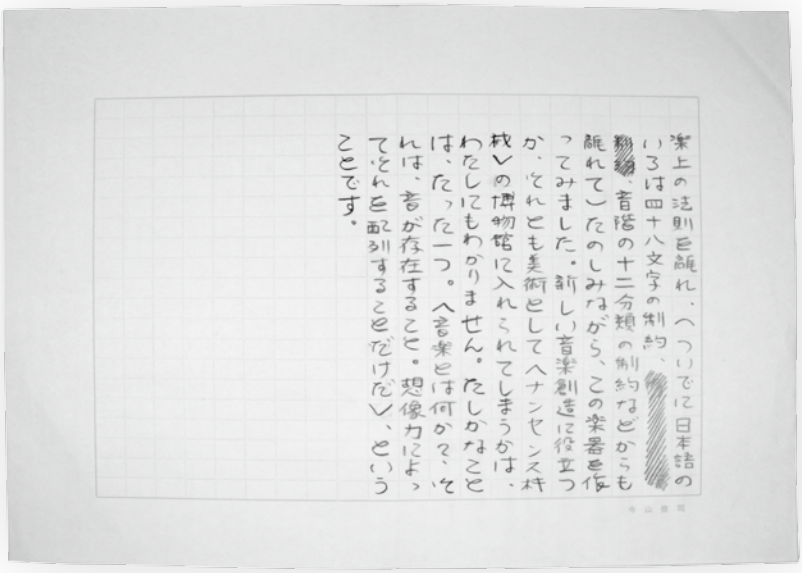


郎が担当しており、プログラム構成は詩人
の寺山修司が担当しております。
その他、技術進行は天井桟敷の河田悠三、
製造は日本コロンビア楽器制作部、制作プ
ロデュースは富士ゼロックスである。（楽
器の形態は別図参照のこと）

作者紹介

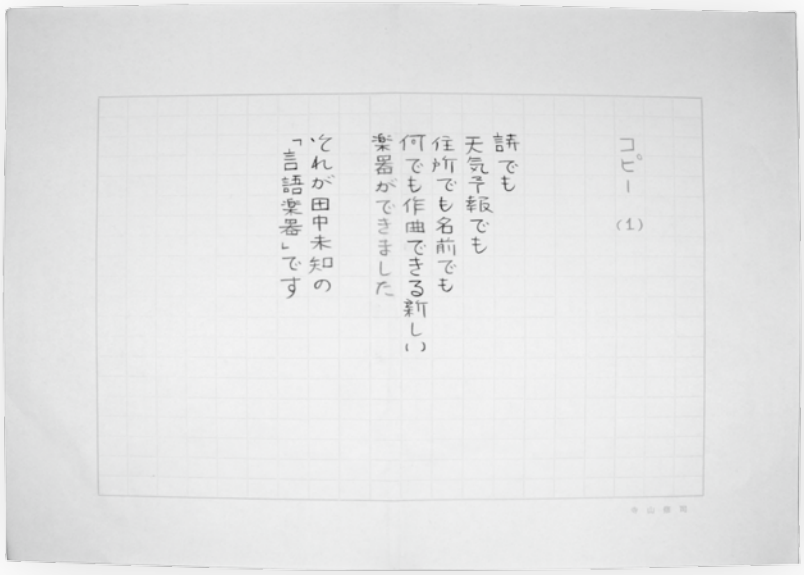
田中未知　一九四六年生・作曲家。
「時には母のない子のように」のヒット
で知られる数少い女流作曲家。この「言
語楽器展」に先立って、二月十一日より
六本木「ガロ」アートギャラリーで「空
想楽器展」をひらき話題になった。
〈作者のことば〉
音楽はゲームであり、楽器はそのための
道具にすぎません。わたしは、従来の音

図24　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》6



楽上の法則を離れ、（ついでに日本語の
いろは四十八文字の制約、
音階の十二分類の制約などからも
離れて）たのしみながら、この楽器を使
ってみました。新しい音楽創造に役立つ
か、それとも美術としてヘナンセンス材
料〉の博物館に入れられてしまうかは、
わたしにもわかりません。たしかなこと
は、たった一つ。〈音楽とは何か？、それ
は、音が存在すること。想像力によっ
てそれを配列することだけだ〉、という
ことです。

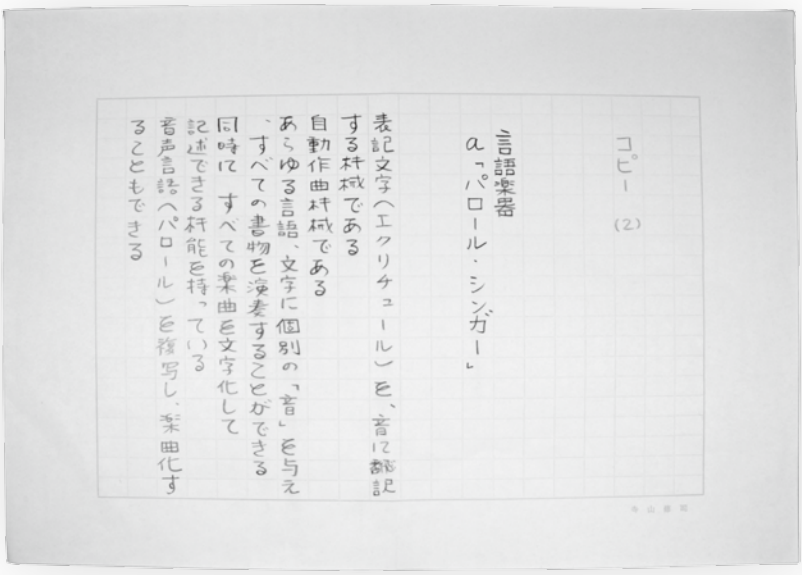
図25　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》7



コピー　（1）

詩でも
天気予報でも
住所でも名前でも
何でも作曲できる新しい
楽器ができました
それが田中未知の
「言語楽器」です

図26　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》8

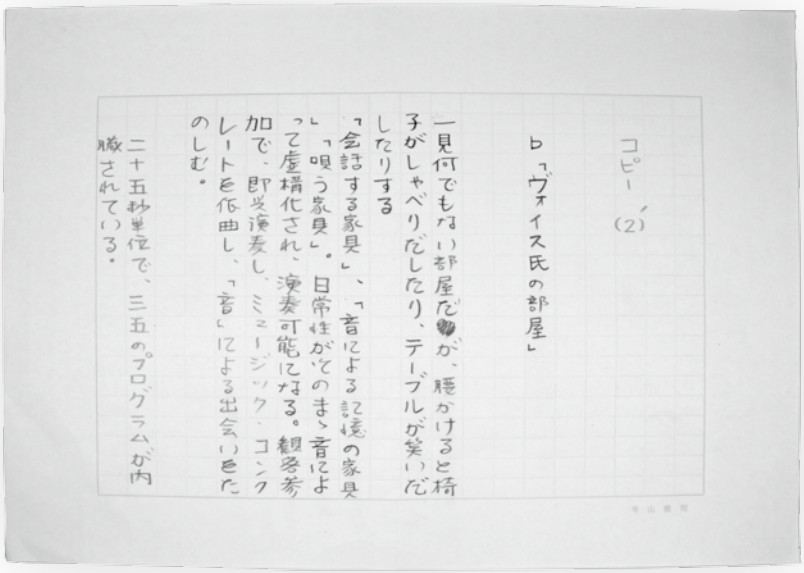


コピー　（2）

言語楽器
a「パロール・シンガー」

表記文字（エクリチュール）を、音に転記
する材械である
自動作曲材械である
あらゆる言語、文字に個別の「音」を与え
、すべての書物を演奏することができる
同時に　すべての楽曲を文字化して
記述できる材能を持っている
音声言語（パロール）を複写し、楽曲化す
ることもできる

図27　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》9



コピー（2）

b「ヴォイス氏の部屋」

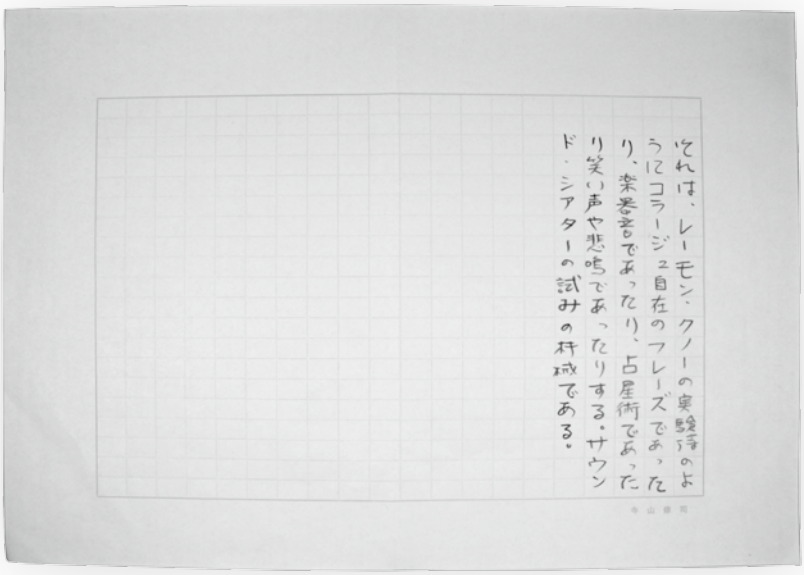
一見何でもない部屋だが、腰かけると椅子がしゃべりだしたり、テーブルが笑いだしたりする

「会話する家具」、「音による記憶の家具」「唄う家具」。日常性がそのまゝ音によって虚構化され、演奏可能になる。観客参加で、即興演奏し、ミニ・ジック・コンクレートを作曲し、「音」による出会いをたのしむ。

二十五秒単位で、三五のプログラムが内蔵されている。

寺山修司

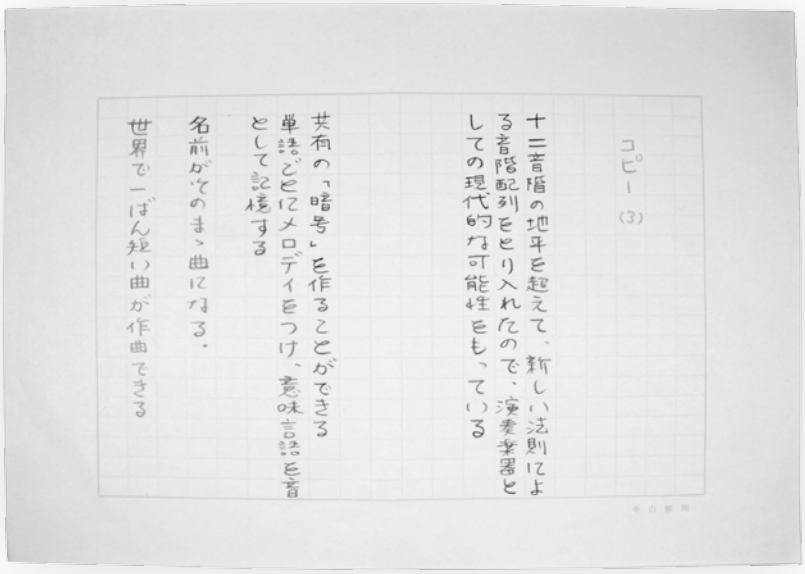
図28　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》10



それは、レーモン・クノーの実験詩のようにコラージュ自在のフレーズであったり、楽器音であったり、占星術であったり笑い声や悲鳴であったりする・サウンド・シアターの試みの枠域である。

寺山修司

図29　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》11



コピー（3）

十二音階の地平を超えて、新しい法則による音階配列をとり入れたので、演奏楽器としての現代的な可能性をもっている

共有の「暗号」を作ることができる

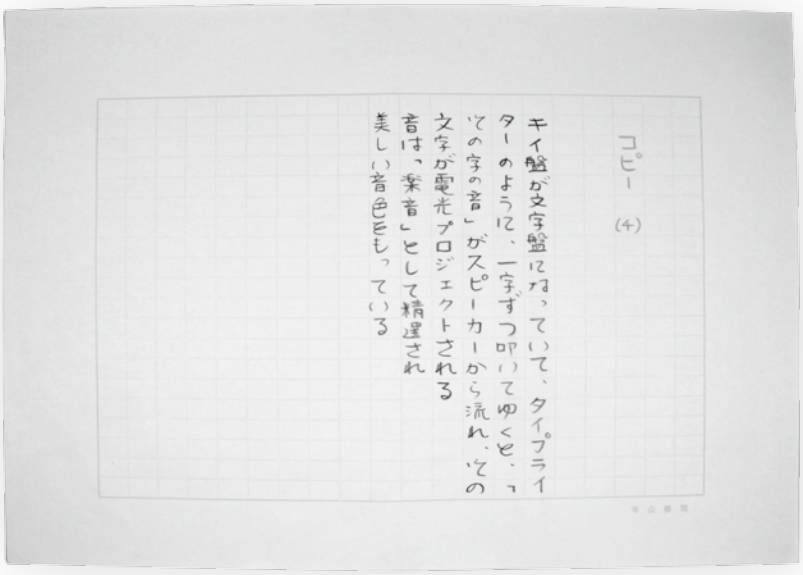
単語ごとにメロディをつけ、意味言語を音として記憶する

名前がそのまゝ曲になる。

世界で一ばん短い曲が作曲できる

寺山修司

図30　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》12

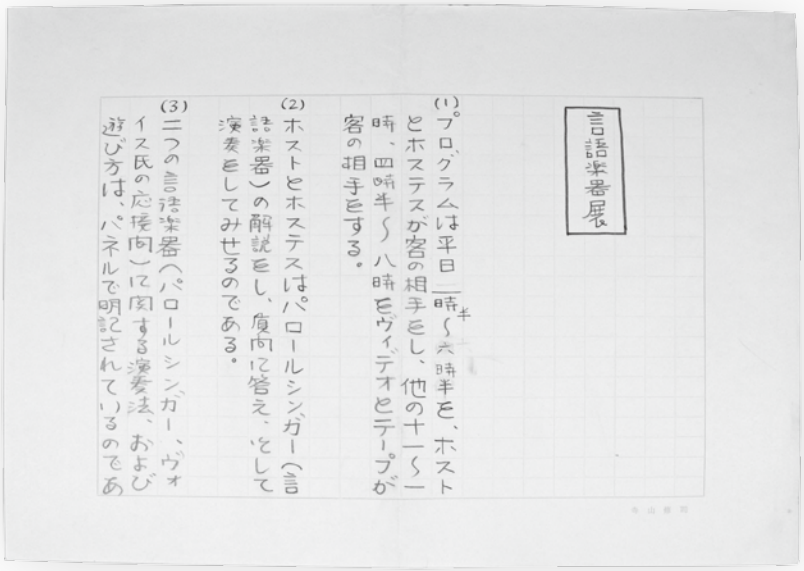


コピー　(4)

キイ盤が文字盤になっていて、タイプライターのように、一字ずつ叩いてゆくと、「その字の音」がスピーカーから流れ、その文字が電光プロジェクトされる
音は「楽音」として精選され
美しい音色をもっている

寺山修司

図31　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》13



言語楽器展

(1) プログラムは平日一時半～六時半を、ホストとホステスが客の相手をし、他の十一～一時、四時半～八時をヴィデオとテープが客の相手をする。

(2) ホストとホステスはパロールシンガー（言語楽器）の解説をし、質問に答え、そして演奏をしてみせるのである。

(3) 二つの言語楽器（パロールシンガー、ヴォイス氏の応接間）に関する演奏法、および遊び方は、パネルで明記されているのであるが、ホストとホステスはそれを反復し、個別的に解説してみせる必要があるのである。

(4) 原則として、パロールシンガーはホステスが担当し、ヴォイス氏の箱はホストが担当する。いずれも観客参加形式でショーアップするのが定時

一時半　五時半

の各二回を基本とする。

休日　祭日は　時間変更

一時（ホストの客への呼びかけとパロールシンガーの説明・観客の要求・――そしてホステスによる演奏・（二〇分）
（ホストのヴォイス氏の応接間の説明と観客参加による演奏・（二〇分）
（観客自身のパロールシンガー演奏とホステスの、ひき方の説明・（二〇分）

寺山修司

図32　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》14

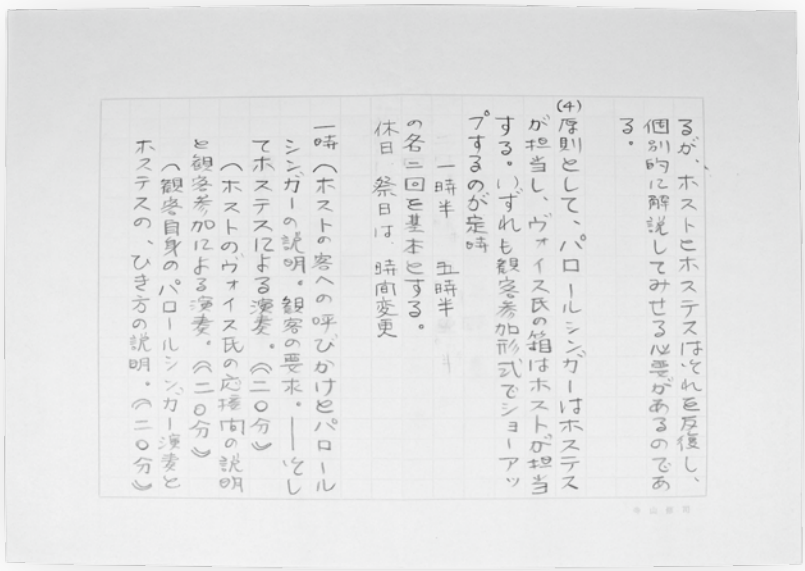
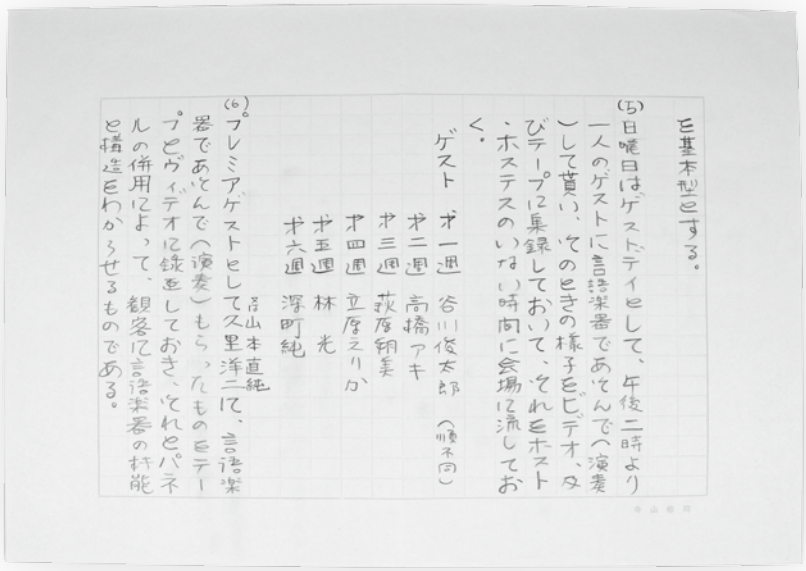


図33　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》15

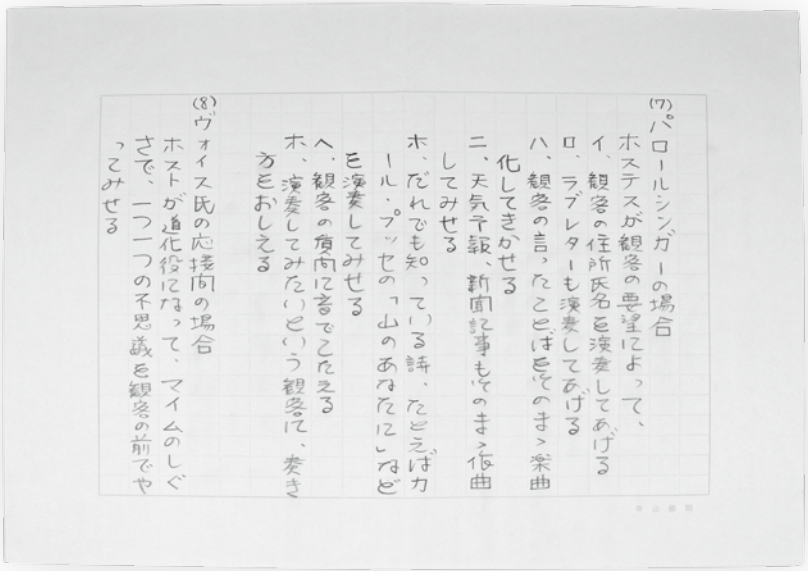


を基本型とする。

(5) 日曜日はゲストデイとして、午後二時より一人のゲストに言語楽器であそんで（演奏）して貰い、その時の様子をビデオ、及びテープに収録しておいて、それをホスト、ホステスのいない時間に会場に流しておく。

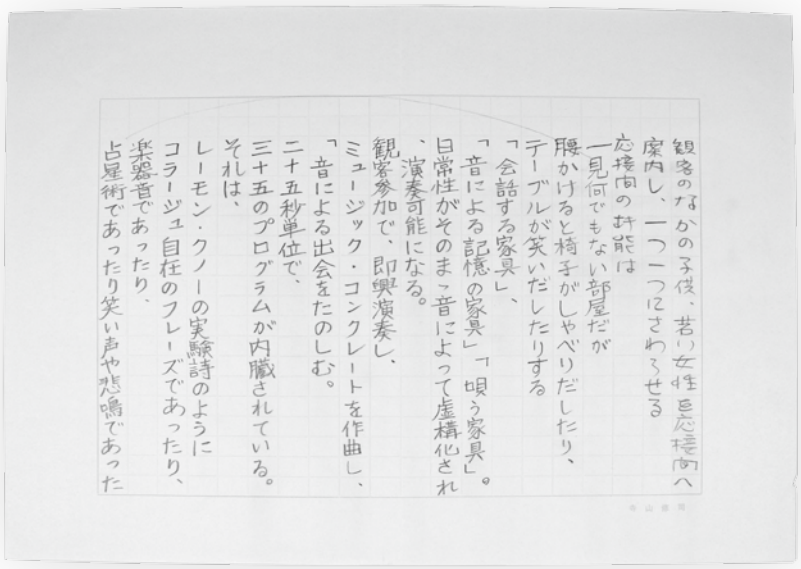
ゲスト　第一週　谷川俊太郎（詩人）
　　第二週　高橋アキ
　　第三週　荻原朔美
　　第四週　立原えりか
　　第五週　林　光
　　第六週　塚町純

(6) プレミアゲストとして久里洋二（寺山直純）に、言語楽器であそんで（演奏）もらったものをテープとヴィデオに録画しておき、それとパネルの併用によって、観客に言語楽器の技能と構造をわからせるものである。



(7) パロールシンガーの場合
　ホステスが観客の要望によって、
　イ、観客の住所氏名を演奏してあげる
　ロ、ラブレターも演奏してあげる
　ハ、観客の言ったことばをそのまゝ楽曲化してきかせる
　二、天気予報、新聞記事もそのまゝ作曲してみせる
　ホ、だれでも知っている詩、たとえばカール・ブッセの「山のあなたに」など を演奏してみせる
　ヘ、観客の質問に答でこたえる
　ト、演奏してみたいという観客に、楽器をおしえる

(8) ヴォイス氏の応接間の場合
　ホストが道化役になって、マイムのしぐさで、一つ一つの不思議を観客の前でやってみせる



観客のなかの子役、若い女性を応接間へ案内し、一つ一つにさわらせる
応接間の技能は
一見何でもない部屋だが
腰かけると椅子がしゃべりだしたり、
テーブルが笑いだしたりする
「会話する家具」、
「音による記憶の家具」「唄う家具」。
日常性がそのまゝ音によって虚構化され、演奏可能になる。
観客参加で、即興演奏し、
ミュージック・コンクレートを作曲し、
「音による出会をたのしむ。
二十五秒単位で、
三十五のプログラムが内臓されている。
それは、
レーモン・クノーの実験詩のように
コラージュ自在のフレーズであったり、
楽器音であったり、
占星術であったり笑い声や悲鳴であった

図34　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》16

図35　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》17

図36　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》18　本頁三行目までが寺山の直筆。

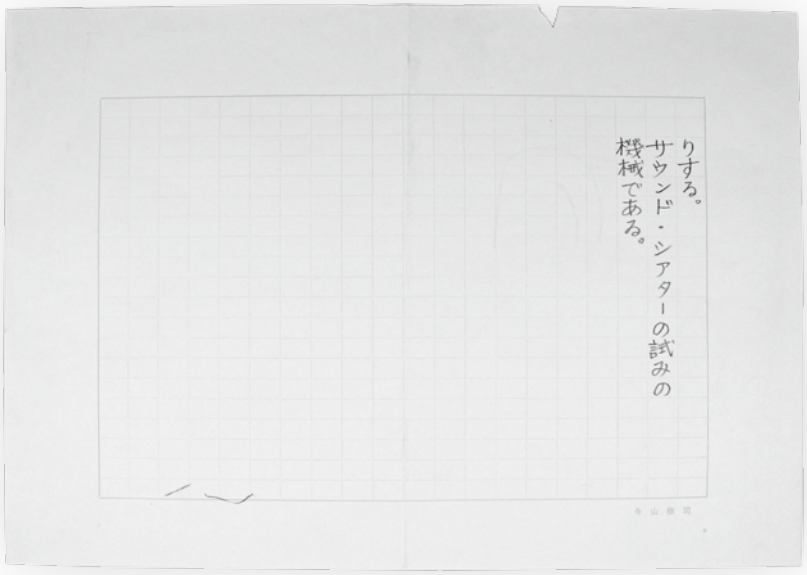
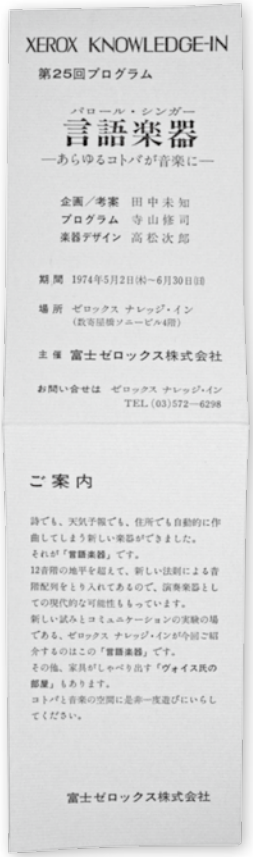

りする。
サウンド・シアターの試みの
機械である。

図37　寺山修司《「言語楽器」展のための構想》19　本頁は寺山の直筆ではない。



XEROX KNOWLEDGE-IN

第25回プログラム

パロール・シンガー

言語楽器

—あらゆるコトバが音楽に—

企画／考案　田中未知
プログラム　寺山修司
楽器デザイン　高松次郎

期間　1974年5月2日(木)～6月30日(日)

場所　ゼロックス ナレッジ・イン
(数寄屋橋ソニービル4階)

主催　富士ゼロックス株式会社

お問い合せは　ゼロックス ナレッジ・イン
TEL (03)572—6298

ご案内

詩でも、天気予報でも、住所でも自動的に作曲してしまう新しい楽器ができました。
それが「言語楽器」です。
12音階の地平を超えて、新しい法則による音階配列をとり入れてあるので、演奏楽器としての現代的な可能性ももっています。
新しい試みとコミュニケーションの実験の場である、ゼロックス ナレッジ・インが今回ご紹介するのはこの「言語楽器」です。
その他、家具がしゃべり出す「ヴォイス氏の部屋」もあります。
コトバと音楽の空間に是非一度遊びにいらしてください。

富士ゼロックス株式会社

図38 「言語楽器」展案内状

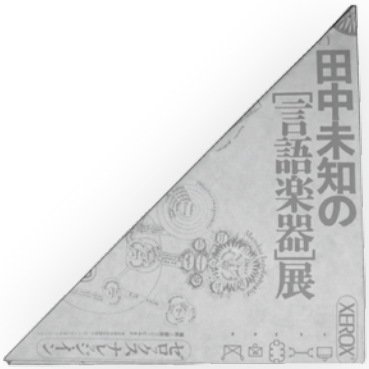


図39 「言語楽器」展チラシ1（デザイン：杉浦康平）

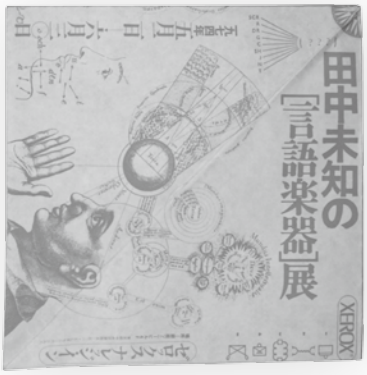


図40 「言語楽器」展チラシ2

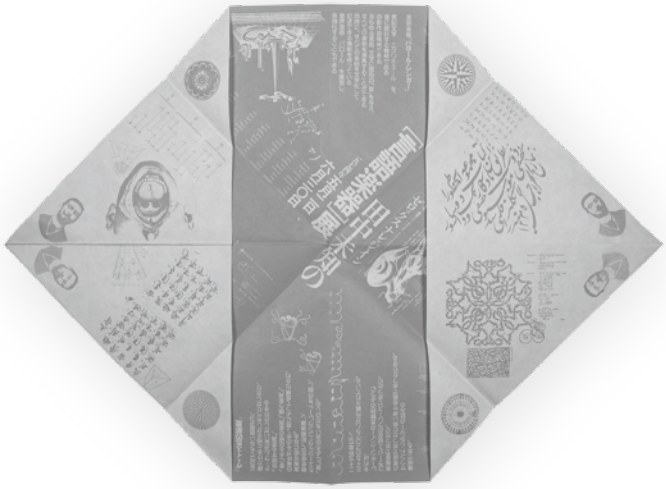


図41 「言語楽器」展チラシ3

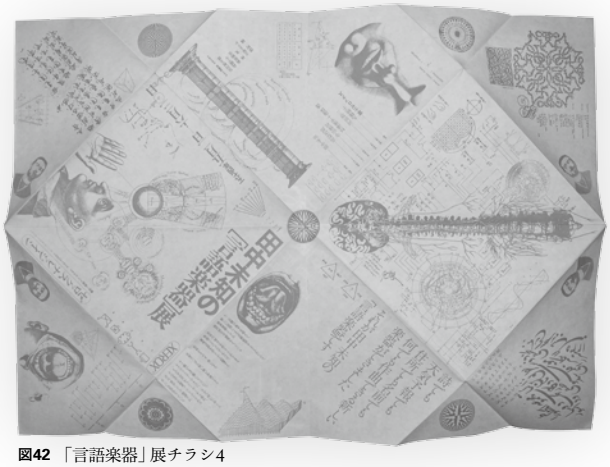


図42 「言語楽器」展チラシ4

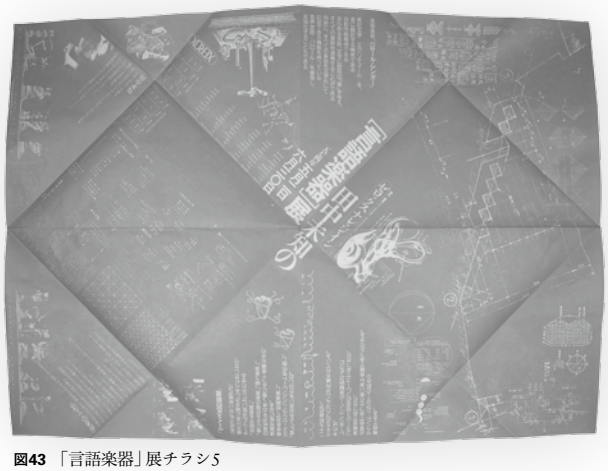


図43 「言語楽器」展チラシ5

言語楽器の誕生

田中未知

一）　1970年代、一般家庭の固定電話機がダイヤル式からプッシュフォンに変わる時代の事である。

最新式のプッシュフォンは、ナンバーを押す度、ドレミの異なる音階が符合していて、ピピポピプ・・なんて感じの音が耳にはじくのだった。私はただちに「東京都の電話帳の番号を押してゆけば、電話帳一冊分の音を鑑賞できる!」その発想に嬉々とした。

二）　高松次郎さんに、この話をすると、その会話はどこ行くともなし「ドとレの間にも無限に音は存在するってことになるよね!」この発想にはさらに驚喜! した。

このシンプルな二つの発想が「言語楽器・誕生物語」のプロローグである。

私は子供の頃から何事にも好奇心が旺盛で、人より「不思議不思議の感覚」を備えていた。それは常に「問いが問いを生み出し、問いが問いを追いかける」そんな流れに絡めとられてゆく自分の楽しみの拠り所だった。

事実、その頃の私は、自分にしか理解出来ない記号を作り、旅のメモとした。以前から、日本語のことばや記号が機能的でない事に疑問を感じていたのだ。そして、このドとレの間の音階の存在に気がついた後は、この聞いた事のない音への関心は勢いを加速した。

それからは専門的なことには無知無学の身でありながら、言語学と音楽原理の本に首っ引き、多くの理解不能部分は切り捨て、インスピレーションと直感で言語楽器のイメージを構築し、創造力は可動し始めた。

西洋音楽の起源はピタゴラス音階に始まり、純正調、12音階への流れとなって現在に至っている。振動数の共鳴度が高いほど美しい音に聞こえる事を知り、原始的なピタゴラス音階、純正調を基盤とし、西洋音楽に不足している7倍音を取り込むことで1オクターブ32音階を構成。

音階の一音は「音の点」となるが、音階の無限を作り出すとするなら、それは自ずと「音の線」に成らざるを得ない。こんな事を考えている時、別のところで近藤譲さんが「線の音楽」ということに着目していることを知った。この「線」の意味は私の「音の線」とは少々違う。たとえばピアノで一音のキーを打ったとする。これは音楽と言えるだろうか?　音楽とは数種の音階をつなげて、旋律（波状の曲線）となって聞こえた時に初めて成立する?　近藤さんの「線の音楽」は、このあたりの模索を表現とした作品と見ている。

これに準じて私の「言葉」に対する疑問も同じ地平にあった。日本語の発音記号となるひらがな、カタカナの一字一音を取り出して「言葉」と言えるだろうか?　（時には「め（目）」「て（手）」「は（歯）」など身体名称に一音を持って意味をなす例はあるが甚だ少数である。）

多くはいくつかの一字一音が組み合わさって、意味を生じて初めて「言葉」として認識出来るのだ。

この一字一音の記号は世界でも日本だけの珍しい記号とみた。（世界の言語全体に及んで調べた訳ではないので多少認識不足の可能性はあるかもしれない。）

言語が異なるにも関わらず、ヨーロッパの記号は基本的にアルファベットが使用されている。ただアルファベットは断じて一字一音の発音記号からは遠い位置にある。母音は別にしても子音を並べてみよう。XKRWQLを誰も発音して読むことは出来ない。

こういった音の点と線。記号の点と線。近似した地平で近似した問いが生まれてくることは自明だ。そこで音と言語の突き合わせは交換可能であることを発見。

音を言語に変換。言語を音に変換。それはモールス信号のコード同様、音を聞いて言葉に翻訳。言葉を音符にして音を奏でる。これらの題材が言語楽器誕生の種子となった。

近藤さんの作品「線と音楽」は、本や新聞を音符にして演奏した時の言語楽器の音に似通っている。もちろん1オクターブ32音階は純正調の美しい和音が12音階より数多く存在していることを知ってほしい。

この楽器が一時的な玩具として扱われ、永遠に忘れ去られるものか?

あるいは、ある日12音階の地平の壁を突き破り、新たな音楽世界に変容をもたらせるかは誰が知ろう?

最近ネット上に「純正律音階を簡単に演奏できる楽器が身近なものになるといいなと思っていました。」こういった意見を述べている人がいた。

言語楽器を考案して38年、やっと人々の好奇心の方向性が多岐に広がる時代が到来したのかと思うと感慨無量である。

2013年1月29日

「MOTコレクション　クロニクル1964-｜OFF MUSEUM」展関連プログラム「塩見允枝子　トーク＆パフォーマンス　インターメディア／トランスメディア——多様な作品群を繋ぐ手法」採録

このプログラムは、平成24年度第1期常設展示「MOTコレクション　クロニクル1964-｜OFF MUSEUM」展に関連して、2012年4月29日に開催した。前半は、出品作家の塩見允枝子によるトークを行い、後半はパフォーマンスを行った。作品は、《顔のための消える音楽／ヴァージョン2012》、《顔のための消える音楽＋バウンダリー・ミュージック／2012—ジョージ・マチューナスに捧げる》、《ウォーター・ミュージック／ヴァージョン2012》、《ディレクション・イヴェント／ヴァージョン2012》。演奏は、大井浩明、柴田暦、福井とも子、村井啓哲、矢野礼子、ヤリタミサコと観客有志による。

以下は、トークの原稿と書き起こしをもとに加筆したものである。（藤井亜紀）

皆さん、こんにちは。前半は、映像を交えながら少しお話しをさせて頂き、後半のパフォーマンスでは、前もってお願いしております6人の出演者の方々を中心に、客席の皆様からも何名か加わって頂いて、ご一緒にパフォーマンスして頂きたいと思います。誰にでも直ぐにできるような簡単な事柄ですから、どうぞ奮ってご参加くださいますようお願いいたします。

全体のタイトルは、「インターメディア／トランスメディア」となっていますが、今日のお話のポイントは、「トランスメディア」の方にあります。この言葉は、私が過去の自分の作品を振り返った時に、ふと思い付いた造語で、その意味は、一つのコンセプトをキイにして、次々に異なった媒体で作品を造っていく、ということです。例えば初めはイヴェント作品であったものを、オブジェクトにしたり、音楽作品にしたり、映像にしたり、というようなことです。その場合、表現形態は異なっても、元のコンセプトは何らかの形で引き継がれています。

旅行用語でトランスファーとかトランジットという言葉がありますね。人々が乗り物を乗り換えて旅を続けていくように、メディア（媒体）を乗り換えて、創作を続けていくという意味です。ところで皆さんはこの「トランスメディア」という言葉をどこかでお聞きになったことはありませんか？　と言いますのは、自分では造語だと思っていても、知らない所で別の人が違った意味に使っている、という場合がないとも限りませんからね。なにしろメディアに関する言葉はいろいろあって、紛らわしいですね。そう言う自分が、もっと紛らわしくしているのではないかと言われれば、その通りなんですけれども（苦笑）。

現在では、単にメディアと言うと、テレビや新聞などのマスメディアを指すことが多く、そしてメディアアートというと、コンピュータを使った諸々のアートは勿論のこと、マンガやアニメまで指すんだそうですね。ところが、1960年代に「フルクサス」のディック・ヒギンズが「インターメディア」という概念を提唱したときには、彼はこの言葉を、こんな風に定義していました。「詩とか音楽という既成のジャンルの間にある表現形態、例えば、音声詩や視覚詩のようなものを指す」と言うのですね。そして私達もメディアという言葉を、単に芸術表現の為の媒体、つまり音や言葉、光、物体、映像などという意味に解釈していたのです。このように時代によって言葉の意味が変わってきている訳ですね。そして1969年には東京で、「グループ・音楽」の小杉武久さん、刀根康尚さん、私の3人で、「インターメディア・アート・フェスティヴァル」を企画しました（図1）。これがそのポスターで、この大きな口を開けているのが、ディック・ヒギンズです。これは彼の《Danger Music（危険な音楽）》17番を演奏している写真ではないかと思います。そのインストラクションは、「Scream!（叫べ）」という言葉が6回連なっていますから。この3日間に及ぶコンサートでは、「フルクサス」の作品約20曲を私達が当時持っていたインターメディアの概念と技術を通して解読し演奏しました。残念ながら、その時の記録がなにもないのが、もったいないと思っているんですけれども。そしてその2週間後には、今度は湯浅譲二さん、秋山邦晴さん、ロジャー・レイノルズさんの3人が企画された「クロス・

図1
「インターメディア・アート・フェスティヴァル」1969年、ポスター

図2
「クロス・トーク／インターメディア」1969年、チラシ

図3
塩見允枝子《Amplified Dream》、「クロス・トーク/インターメディア」でのパフォーマンス、1969年

図4
塩見允枝子とアリソン・ノールズ、ニューヨーク、ワシントン・スクエアー画廊でのパフォーマンス、1964年　撮影：ピーター・ムーア
Photo by Peter Moore © Estate of Peter Moore / Licensed by VAGA, NY

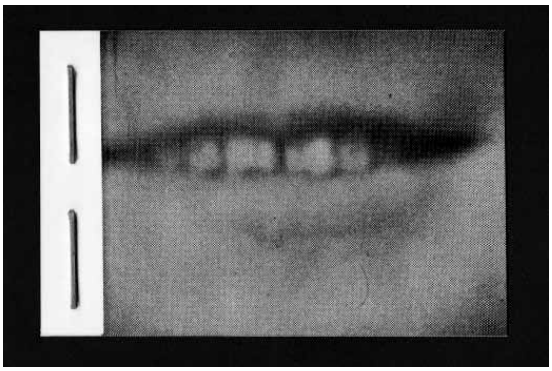


図5
塩見允枝子《顔のための消える音楽》1960年代後半/2002年、フリップブック表紙

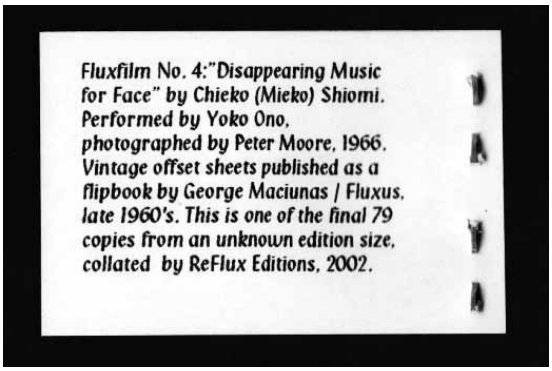


図6
塩見允枝子《顔のための消える音楽》1960年代後半/2002年、フリップブック裏表紙

トーク/インターメディア」が行われました（図2）。こちらの方は、東京アメリカ文化センターの主催で、海外からも何人かの作家が来日して大変大掛かりなパフォーマンスが繰り広げられたのです。私はこの両方のフェスティヴァルで《Amplified Dream》1と2という、内容的には全く別の作品を上演しました。この場面は音響操作が行われている場所ですね（図3）。ここは代々木の国立競技場のだだっ広い空間の隅っこです。この右手に広い空間があって、3台のグランド・ピアノと大きな特製の風車や扇風機などでパフォーマンスが行われています。この2つの作品に共通していたことは、音や光、モールス信号のリズムやプロジェクターで投映される光の文字、そして人体の動きなどが、部分的には電子テクノロジーを通じて、お互いがトリガーとなって全体が進行していくような非常に緊密な構造で出来ていたことです。どの一つが欠けても全体が成り立たなくなる、というような仕掛けになっていました。これがマルチメディアとは違う事柄です。このように当時の私にとっては、全ての媒体（メディア）が対等な価値を持つものとして、目の前に広がっていました。こうしてインターメディアを経験したことが、次のステップであるトランスメディアへと移行していく下地になっていたのだと思います。これから幾つかの例を挙げながら、どんな風にトランスメディアしたかについてお話し、その内の幾つかは後で実際に演奏して頂きます。

1　顔のための消える音楽

最も古い例は、《Disappearing Music for Face（顔のための消える音楽）》というイヴェント作品です。インストラクションは単に、「微笑み、そしてそれを次第に消していく」というもので、初演は1964年にニューヨークのワシントン・スクエアー画廊で、「フルクサス」の仲間や会場の皆さんと一緒に行いました（図4）。これは、ジョージ・マチューナスが企画した、「パーペチュアル・フルックス・フェスト」の内の１日でした。右側が、アリソン・ノールズです。当時、私はまだ英語が下手だったものですから、今でも下手なんですけれど、私の代わりに司会を引き受けてくれました。48年前の写真です。まだお互い若かったですね。

それから間もなくマチューナスは、この《顔のための消える音楽》から、オノ・ヨーコさんの演奏とピーター・ムーアの撮影で、8ミリ・フィルムの作品を作りました。これは、他の人の作品と一緒に《FLUXFILMS》の中に納められ、現在日本では、大阪の国立国際美術館に収蔵されています。マチューナスはその後、このフィルムから何コマかを取り出して印刷し、それを束ねてフリップブックにしました（図5）。こうして見ると大変大きいですが、サイズは4cm×6cmという、手のひらに収まってしまう小さなものです。顔の写真は全部で39枚あり、パラパラとめくると微笑がスッと消えていきます。すごく鮮やかです。今の時代になってみても、フリップブックは面白いですよね。自分の指のアクションが錯覚としての映像を生み出します

から。これを最初に発見して作った人の歓びが想像できるような気がします。最後のペイジには、このフリップブックの由来が書かれています（図6）。これによると、マチューナスの残した未整理の印刷物から、79部のエディションとして2002年にReFluxから出したものだそうです。私の所にも5冊送られてきました。ですから、トランスメディアは、私の作品に限って言えば、マチューナスが始めてくれた手法であるとも言えるのです。尤も、彼はこうした言葉は使っていませんでしたし、大体メディアという言葉自体も、「フルクサス」周辺では、ディック・ヒギンズがインターメディアを提唱する迄は、使われていなかったように思います。その後2002年に、ミネソタ在住の音楽学者でありコーラスの指揮者でもあるミシェル・エドワーズさんという人が家に来て、私の初期のイヴェント作品を基に、彼女の合唱団のために新たなパフォーマンス作品を創ってくれないか、と頼まれたことがありました。そこで、この《顔のための消える音楽》で、《スマイル・ミュージック》という合唱曲を作曲したのです。これは舞台配置ですが、一番上がコーラスです。ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、そして真ん中に持続和音を歌うグループがいまして、一番下、ステージの前列に4人のスマイル・パフォーマーが腰かけています。彼女たちは、それぞれ後ろのコーラスから聞こえてくる特定の音に反応して微笑むようになっています（図7）。例えば、スマイル・パフォーマー1は、1.という番号の小節の、簡易楽器やノイズの音が聞こえるとにっこりと微笑み、スマイル・パフォーマー2は、2.という番号の小節の口で立てる音やナレーションに反応して微笑むのです（図8）。そしてコーラスが歌う歌詞は、翻訳すると「顔のための消える音楽を演奏するときには、心の中に本当の喜びを沸き上がらせるといいでしょう。例えば、海の上に真っ赤な夕日が輝いている光景を思い浮かべて下さい。そして、微笑みを消していくときには、その壮麗な太陽が水平線の彼方にゆっくりと沈んでいく様子を思い描いて下さい」というものです。ですからそれは、微笑む役を演じる4人のパフォーマーへの、如何に微笑み、如何にそれを消していくかについての、アドヴァイスでもあったのですね。

このように、元はイヴェント作品であったものが、8ミリ・フィルムの映像になり、さらにそこから小さなパラパラ本が作られ、最後は合唱曲になった訳です。といっても、まだ終わった訳ではなくて、これからも別のメディアで新たな作品がつくられる可能性が無いとは言えません。今日は休憩の後で、この《顔のための消える音楽》を、或る複合的な新しいヴァージョンで、実際に演奏して頂きたいと思っています。

2　エンドレス・ボックス

一方、最も新しい例は、《エンドレス・ボックス》の映像作品です。常設展の会場で既にご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、白い箱を開けていく映像が上演されていますね。これは、実は今回の展示のために作成されたものなんです。元々美術館としては、この箱を作者である私が開けていくのを、一種の記録として撮影しておきたいという、どちらかというとアーカイヴ的な発想で提案して下さったのですが、私はそれよりも、第三者による新しい映像作品として作って頂きたいと、強く主張した訳です。偶々、このことについてお話していた学芸員の藤井亜紀さんの手がとても奇麗だったものですから、白い箱とそれを開けていく彼女の手以外は真っ暗であるような映像がふっと頭に浮かび、そして開けた箱も前に積み上げていくのではなく、すーっと視界から消えて、次第に小さくなっていく白い箱と手だけが見えるような映像を作って頂きたいとお願いしました。そして、山城大督さんという作家の方が撮影して下さり、あのような美しい映像が生まれた訳です。

元々この《エンドレス・ボックス》というのは、1963年にヴィジュアルなディミヌエンド（これは音楽用語で、音を次第に小さくしていくという意味ですが）、そうした次第に減衰していく音の持続を視覚化したオブジェクトとして作ったものです。

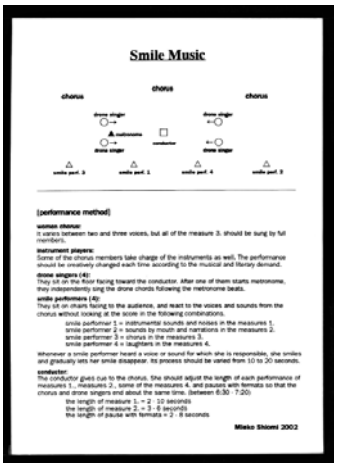


図7
塩見允枝子《スマイル・ミュージック》2002年、舞台配置

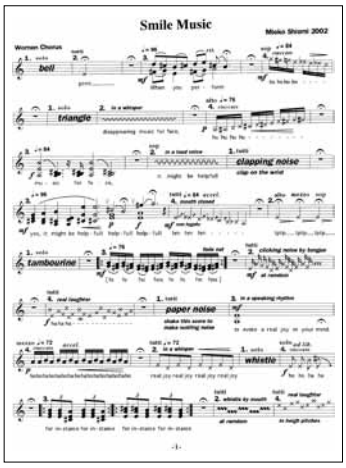


図8
塩見允枝子《スマイル・ミュージック》2002年、楽譜

図9
塩見允枝子《そして夜鶯は翔んだ》、東京・アールヴィヴァンでのパフォーマンス、1992年、『美術手帖』第658号（1992年9月号）より

実際にはこの時点で、私の頭の中で音がオブジェクトになるというトランスメディアが行われていたのですが、その時は、全く無意識でした。ただ、この最新作の映像を見ていると、そうした時間が再現されていて、この箱を作った時の原点に戻ったような気がします。その意味でもこの映像作品を作って頂いたお二人には感謝しています。

実は、この《エンドレス・ボックス》は、パフォーマンスでも使ったことがあるのです。もっと分厚い紙で大きな《エンドレス・ボックス》を作って、舞台の上で3度ばかり使いました。最初は、1984年の《時の戯れ》という曲で、ピアノ演奏や他のパフォーマンスが行われている中で、一人のパフォーマーが舞台中央あたりから、舞台の袖に向かって、箱をゆっくりと開けて一列に並べていきました。それはまるで流れ去った時間の残像を見ているようでした。これは、1992年に東京のアールヴィヴァンで行った時の写真です（図9）。他に写真が手元になかったので、『美術手帖』のペイジをそのままスキャンしたのですが、これはタイトルが《そして夜鶯は翔んだ》という30分ばかりの曲です。鳥の声が二つのスピーカーの間を、時折、左から右へ、又右から左へと音像移動する度に、グランド・ピアノの蓋の上では、一人の女性が《エンドレス・ボックス》を一つずつ開けては積み上げていきます。ここでは、開くというコンセプトで様々なパフォーマンスが行われていて、ピアノの上には幾つかのオルゴールが並べられていますし、ピアノの蓋自体も開閉できます。又、この右の方にいる男性は封筒を一つずつ開いては、中の手紙を読んでいますが、それは《スペイシャル・ポエム No.5 open event（開くイヴェント）》へ寄せられた報告を日本語に訳したものでした。こんな風に、減衰していく音のイメージがオブジェクトになり、パフォーマンスに使われ、そして映像作品となった訳です。

3　ウォーター・ミュージック

次に《ウォーター・ミュージック》についてお話します。これは1964年にニューヨークに行く前に書いたイヴェントの作品で、「1.水に静止した形を与える。2.水にその静止した形を失わせる」というものですが、マチューナスへのお土産として、小さな瓶に水を入れて、つまり静止した形を与えてインストラクションと一緒に持っていきました。彼はこのお土産を気に入って、すぐに2.を演奏する、といって水を飲んでしまいました。ちょっと、失礼します。私も《ウォーター・ミュージック》のパフォーマンスをさせて頂きます（コップに水を注いで飲む）。それから間もなく、彼はこのような瓶のエディションを作ったのです（図10）。これは1994年にニューヨークのグッゲンハイム・ミュージアム・ソーホーで、「戦後日本の前衛美術（Japanese art after 1945）」という展覧会が開かれた時に、美術館が絵葉書として作成したものですが、写真はもっと前に撮られたものだと思います。次に私が演奏したのは、1965年に銀座の画廊クリスタルで「FLUX WEEK」という催し物があったときです（図11）。ここでは何をしているかと言いますと、水溶性の糊を薄く塗って乾かしたSPレコード盤をプレーヤーに乗せ、水槽からスポイドで水を吸ってレコード盤に垂らしながら、何度も再生している所なんです。乾いた所は針がすべって音は出ませんが、水が落ちた所だけは糊が溶けて断片的に音が出てきます。垂らす水滴の数をだんだん増やしていくと、それだけ溶けた部分が増えて、次第に何という音楽か分かるようになってくるのです。これがそのときに使ったレコード盤で、音楽はウェーバーの《舞踏への勧誘》でした（図12）。これは私が両親から譲り受けた

図10
塩見允枝子《ウォーター・ミュージック（ジョージ・マチューナスによるエディション）》1964年　撮影：ブラッド・アイヴァーソン
The Museum of Modern Art, New York. The Gilbert and Lila Silverman Fluxus Collection Gift. Photo by Brad Iverson

図11
塩見允枝子《ウォーター・ミュージック》、東京・画廊クリスタルでのパフォーマンス、1965年、『芸術新潮』より

図12
《ウォーター・ミュージック》で使用した、ウェーバー《舞踏への勧誘》SP盤

ものだったのですが、中央のラベルには針の痕もあり、ディスクにとってはかなり気の毒なパフォーマンスでした。もっと直接的に、水から静止した形を奪い続けたパフォーマンスもあります。これは1992年に神戸のジーベックで行った「メディア・オペラ」というコンサートの中の《ウォーター・ラボ》という作品での演奏ですが、水を入れた容器を打楽器に見立てて、伏せたコップで水面を叩いているところです（図13）。お水遊びのようですが、結構面白い音がするんですよ。

この《ウォーター・ミュージック》というイヴェント作品は、トランスメディアとしては、瓶のオブジェクトくらいしかありませんが、今度は逆に、同じ瓶という媒体を使いながら、中のコンセプトを入れ替えたものがあります。「トランスコンセプト」とでも言いましょうか。展示室にもある《音楽の小瓶》というシリーズがそれで、瓶の中に様々な音楽的ウィットによって、楽譜やテープなどを入れたものです。例えば、この《Sonic Palindrome》の中には、ラテン語の回文にメロディーを付けた楽譜と、それを演奏した録音テープが入っています（図14）。この回文はイタリアのGianni Sassiという人が《フルクサス・バランス》の為に送ってくれたものですが、文章は、「in girum imus nocte et consumimur igni」、意味はラテン語に詳しい友人に訊いたところ、「円に向かって　我々は行く　夜に　そして　吸収される　火によって」だそうです（図15）。なにか神秘的なような、あるいは非常に世俗的なようでもあるのですが、この回文をご存知の方はいらっしゃいますか？　メロディーも真ん中から逆行形になっていますが、これをシンセサイザーで演奏した録音テープが左側の瓶に入っています。右側の瓶にはそれを音響的に逆回転にした音の録音テープが入っています。つまり2つの瓶の間で、音としてもパリンドロームになっているのです。その他様々な音楽標語をカプセルに入れたものや、CDの破片、シリコンロック、胡椒等を使って、いろんな音楽的コンセプトやジョークを詰め込んだシリーズです。ケルンで開かれたサウンド・オブジェクト展のために作りました。それからついでに瓶のシリーズで言えば、イタリアのコレクターであるルイジ・ボノットが、写真の右から2番目の眼鏡をかけた人ですが、「フルクサス」の作家達にデザインやアイディアを求めて、彼の友人のガラス職人、一番右のマッシモさんに依頼して作った「グ

図13
塩見允枝子《ウォーター・ラボ》、神戸・ジーベックでのパフォーマンス、1992年
撮影：高嶋清俊　写真提供：（株）ジーベック

図14
塩見允枝子《Sonic Palindrome》1993年

図15
塩見允枝子《Sonic Palindrome》に入っている、Gianni Sassiによるラテン語の回文

図16
「グラッパ・フルクサス」製作中のモルヴェナのガラス工房にて、1995年

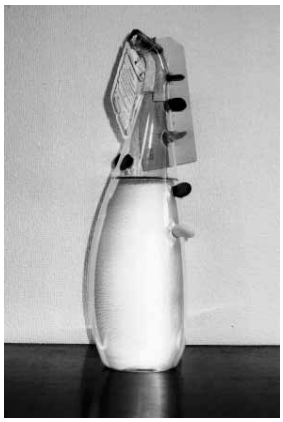


図17
塩見允枝子《音楽的な胎児》1995年

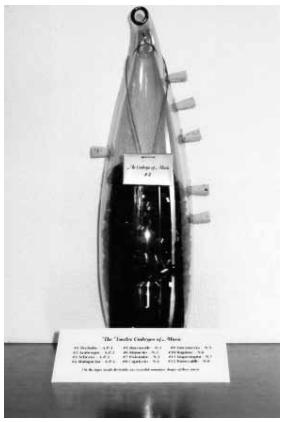


図18
塩見允枝子《12の音楽の胎児》1995年

図19-21
塩見允枝子《ウォーター・ミュージック》、精進湖でのパフォーマンス、2004年　写真提供：GALLERY 360°

ラッパ・フルクサス」のシリーズがあります。この写真は、出来上がった瓶にサインをする為に北イタリアのモルヴェナのガラス工房に行った時のものです（図16）。これは《音楽的な胎児》といって、管楽器とも弦楽器ともつかない、楽器としては未分化な、胎児のような姿をイメージしてデザインしたものです（図17）。それからこれは《12の音楽の胎児》という作品で、12個のエディションがあります（図18）。この青い瓶には、それぞれプレリュードやアラベスクといった12種類の既成の曲を、それが音楽としてようやく形を取り始めたかのような、とてもたどたどしい躊躇いがちな弾き方で演奏して録音したテープが入っています。

話がそれてしまいましたが、《ウォーター・ミュージック》はパフォーマンスとしてはいろんな可能性があります。これはギャラリー360°の企画で、ベン・パターソンさんの70歳の誕生日を祝った精進湖でのパフォーマンス風景です（図19-21）。この写真は靉嘔さんが送って下さいました。靉嘔さん、いらっしゃいますか?（客席の靉嘔氏に向かって）「すみません。事後承諾になってしまいました。予め許可を得るべきでしたのに、無断で使わせて頂きました。ごめんなさい。」（会場に笑）　ここでは、湖の水をコップに入れ、リーダーの「お誕生日おめでとう」の声を合図に、それぞれコップを富士山の頂上に重なる位置に捧げ持って、任意の速度で水を滴らせています。終わるとそのまま数歩下がって、最後の一人が演奏し終えるまで皆で見守るというものです。

今日は後で、この《ウォーター・ミュージック》を別のリアリゼーションで演奏して頂くことになっています。

4　バランス・ポエム

1960年代から、私は音楽の他に自然界のいろんな現象や物質、或いはバランスというような概念に興味を持っていて、それらを手掛かりに作品を作ってきたのですが、バランスに関しては、まず66年にパフォーマンスとしての《Balance Poem》というスコアーを書きました。でもそれは初演する機会のないままに、68年には、小さな吊天秤を作って、いろんな重さのカードに印刷した様々な言葉を釣り合わせるオブジェクトを作りました。これは銀座松屋で開かれた、「ちいさなちいさな展覧会」というグループ展に出品したものです（図22）。

90年代になると、今度は「フルクサス」の仲間や友人達と一緒に行う為の《フルクサス・バランス》を郵便によるイヴェントとして行いました。招待した人達には、「天秤の皿の上に、もう一方の皿の上に誰かが乗せるであろうものと釣り合うような何かを提示して下さい」とお願いした訳です。もちろん、誰にももう一方の皿の上に、誰が何を乗せてくるかわかりません。でも皆さん、一筋縄ではいかない人達ばかりですから、回答はそれぞれに凝っていて面白いものが沢山ありました。これは、皆さんからの回答をカードに印刷したものを、95年に自分で組み合わせて34のバランスを作ったものの一つです（図23）。ラリー・ミラーの、「DNAフルックス分子、重さは10億ダルトン＋一つの皮肉な宇宙線」。彼によると、ダルトンは分子の質量の単位で、因みに水分子1個は18ダルトンだそうです。それをアリソンが提示した「ジョン・ケージ」と釣り合わせました。当然ケージのほうが重いですから、ウェイトで調節しようとした訳です。それと並行して、写真などのコラージュによる24枚の

図22
塩見允枝子《バランス・ポエム》1968年

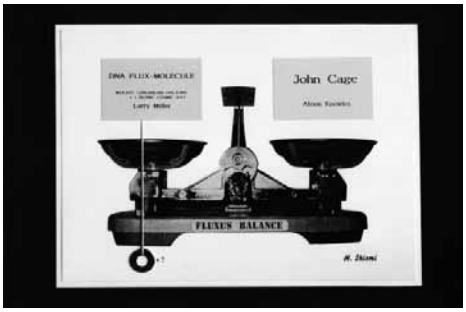


図23
塩見允枝子《フルクサス・バランス 1995》より

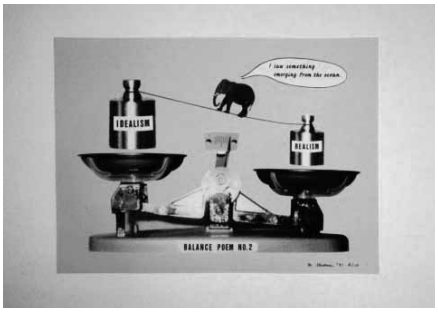


図24
塩見允枝子《バランス・ポエム No.2》1991/1992年

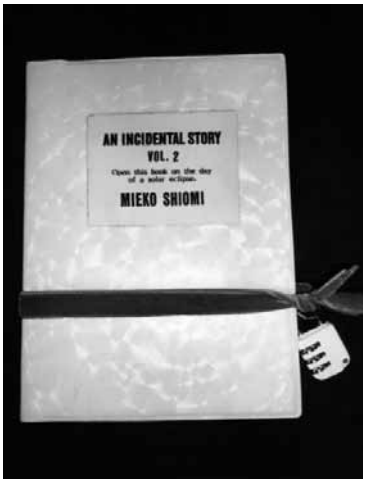


図25
塩見允枝子《AN INCIDENTAL STORY》鍵の掛かった本、1994年

図26
パリ・ドンギュイ画廊での展示風景、1995年

図27
塩見允枝子《日食の昼間の偶発的物語》、神戸・ジーベックでのパフォーマンス、1997年
撮影：高嶋清俊　写真提供：（株）ジーベック

図28
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》2008年

図29
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》第1巻、2008年

図30
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》第2巻、2008年

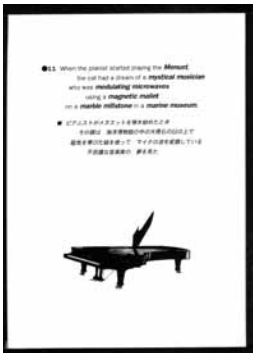


図31
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》第1巻、2008年

図32
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》第2巻、2008年

図33
塩見允枝子《月蝕の夜の偶発的物語》第3巻、2008年

《バランス・ポエム》も作りました（図24）。大きい方の分銅には、「IDEALISM」、小さい分銅には「REALISM」と書いてあります。しかしリアリズムの方が重いです。象が綱を渡ろうとしているのですが、何やら呟いています。展示室にもある一連のバランス物はこんな風に変化していったのです。

5　日食の昼間の偶発的物語・月蝕の夜の偶発的物語

他にもトランスメディアの例はいろいろあるのですが、最も極端な例は、「ブック・オブジェクト」展に出品するために作った鍵の掛かった本から出発したシリーズです（図25）。これは3巻の内の1巻ですが、その内容は、あるピアニストが弾くバッハのパルティータの進行につれて、各舞曲の頭文字と同じ文字

から始まる英単語を多用して作った短い英文の物語なのです。その後それは平面作品となりました。これはパリのドンギュイ画廊での写真です（図26）。それから簡単なパフォーマンスを経て、1997年には《日食の昼間の偶発的物語》というタイトルの室内楽になりました（図27）。編成はナレーションとピアノ、ソプラノ、サキソフォン、パフォーマー、スピーカーからの環境音です。この録画は展示室でも再生されていますね。そして再び、この《月蝕の夜の偶発的物語》3巻を加えて6巻の小冊子になりました（図28）。バッハのパルティータは全部で6曲ありますので、その1曲ずつに物語を作ったのです。尤も、音楽と物語の内容は全く関係ありません。さらに、2008年の豊田市美術館での「DISSONANCES」という展覧会用に、こんな風に、1枚のピアノの写真をいろんなサイズに縮小コピーして切り貼りし、イラスト風にアレンジした絵本も作ってみました（図29-33）。

図34-35
塩見允枝子《ディレクション・イヴェント》、ニューヨーク、ワシントン・スクエアー画廊でのパフォーマンス、1964年
撮影：ピーター・ムーア
Photo by Peter Moore © Estate of Peter Moore / Licensed by VAGA, NY

6　ディレクション・イヴェント

最後に《ディレクション・イヴェント》についてお話しましょう。最初はパフォーマンスの作品でした。これは、ワシントン・スクエアー画廊で初演した時の写真ですが、私は10本の指の先から長い紐が出ている手袋をはめて座っています（図34-35）。10人の参加者がそれぞれ、その紐を引っ張っていきたい方向をカードに書いて読み上げ、紐の根元に結びつけて、実際に紐を引っ張っていくのです。ここにしゃがんでいるのは、アラン・カプローです。地図とコンパスが用意されています。確か、「窓の方へ」とか、「出口の方へ」、具体的には忘れましたが、「ある地名の方へ」とか、中には「far from now」という時間的に解釈した方向もありました。その後、《スペイシャル・ポエム》の2番目のイヴェントとして、郵便によっていろんな国の人達とこの《ディレクション・イヴェント》を行ったのです（図36）。この共同イヴェントは地球を舞台としていますから時差がありますよね。時差の一覧表を送って、同じ瞬間に人々がどのような方向を向いていたかを報告して頂いたのです。単に、天井とか新聞、テレビなどに面していたという報告もあれば、面白い解釈や意図的なパフォーマンスもありました。エレベータの中に回転椅子を持ち込んで上に上がるボタンを押し、自分は椅子に腰掛けて速い速度で椅子をぶん回した、だから、自分は上昇しながら360°あらゆる方向を向いていた、という報告もありました。これはマチューナスです。或いはベッドルームに入ってきたネズミを火箸をもって追っかけ回していたから、いろんな方向へ向かっていただろうとか、4杯目のビールから5杯目のビールへ向かっていたとか、或いは単純化の方向へ向かっていたというような報告もありました。その後、この方向というコンセプトで1枚の厚紙とコンパスを使った平面作品も作ったのですが、これは「ハイレッド・センター」の中西夏之さんと作品交換しましたので、今は、手元にはありません。

又、この概念でピアノ曲を作曲したこともあります。《ピアニストのための方向の音楽》といって、それが演奏されるTPOに応じて、その都度方向や音を書き換えているシリーズです（図37）。不経済な作曲法ですが、リアリティを重視すると、こうなってしまうのです。ピアニストは元のスコアーのフレーズを一つずつ切り取って厚めのカードに貼り付け、1枚ずつバラバラの楽譜を作ってから演奏するのですが、先ずフレーズを弾き、そこに書かれている方向を読み上げ、実際にそちらの方へ楽譜を投げ飛ばすというものです。これは第4番の楽譜の1ページ目で、1999年に北上市で開かれた「日独ヴィジュアル・ポエトリー展」のオープニングの為に書いたものです。ドイツということで「HAMBURG」という地名を選びました。この地名の中には音の高さを表す文字が4つ含まれています。「H、A、B、G」この4つの音でしばらく即興演奏してからハンブルグの方へ向かっ

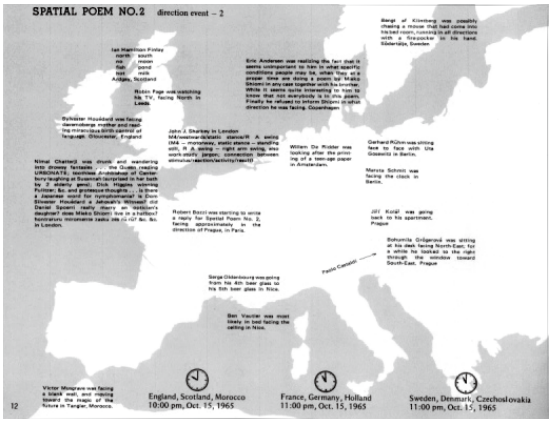


図36
塩見允枝子《ディレクション・イヴェント》、『SPATIAL POEM』より、1965／1976年

て楽譜を投げました。これは1994年に、ニューヨークの「フルクサス・レユニオン・コンサート」で演奏した第2番で、楽譜を投げ飛ばす方向も、一般的な方向の他に、「カウナスにあるマチューナスが生まれた家の方へ」など、それに相応しいものも加えました（図38）。そして私はピアノを弾いた後、日本語で方向を読み上げ、続いてそれを英語、フランス語、デンマーク語、ドイツ語で、少しずつずらせてオーヴァーラップさせながら読み上げて貰いました。勿論、前もって翻訳して頂いたのです。写真で、ピアノの斜め上に白く見えるものが楽譜なんです。パフォーマーは、左から、ジェシカ・ヒギンズ、彼女はディック・ヒギンズとアリソン・ノールズの娘さんです。隣がフランスの詩人ジャン・デュピュイ、次がデンマークの作家のエリック・アンデルセン、そして右端がベン・パターソンです。彼は日本でもおなじみのアメリカ人ですが、今はドイツに住んでいます。

今日はこの《ディレクション・イヴェント》も、全く新しいヴァージョンで8人の方々に演奏して頂きます。

まあこんな風に、一つのコンセプトを自分で何とか扱える媒体を使って、いろんな形に変化発展させることを楽しんできた訳ですが、最後に皆さんに一つお願いがあります。と言いますのは、今日ご出席の皆さんにもこの《ディレクション・イヴェント》に参加して頂きたいのです。どのようにしてかと言いますと、今日この会が終わって皆さんが美術館を出られた後、どういう方向へ向かわれるか、或いは向かいたいか、それは空間的な方向でも、時間的な方向でも、或いはもっと観念的、抽象的な方向でもいいのですが、お渡ししてありますカードに無記名で結構ですから、皆さんが向かわれるであろう方向を書いて箱の中に入れておいて下さい。「～の方へ」とか「～に向かって」、「～を目指して」などと書き添えて頂ければ有り難いです。それらは全てのパフォーマンスが終わった後で読み上げさせて頂きます。そうすれば、今度は皆さんが美術館を出られてから、この《ディレクション・イヴェント》を一種の密かな集団的パフォーマンスとして行って下さることになるのです。今度は皆さんが主役です。

それでは、長い間、ご清聴ありがとうございました。

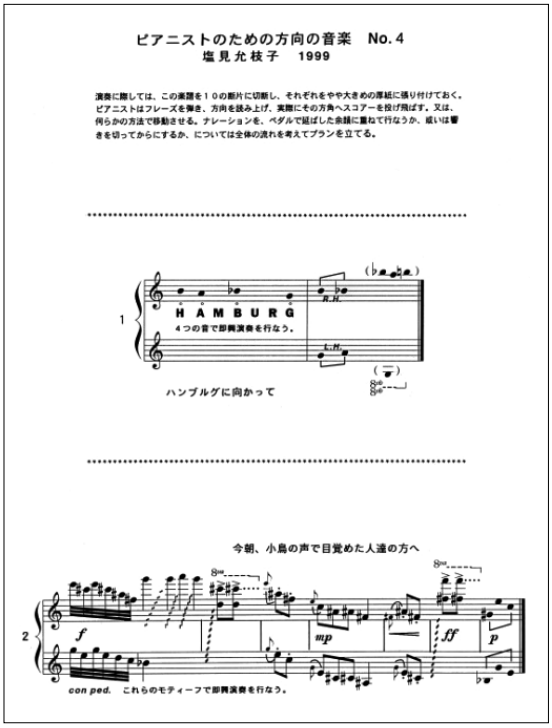


図37
塩見允枝子《ピアニストのための方向の音楽》楽譜、1999年

図38
塩見允枝子《ピアニストのための方向の音楽》、「フルクサス・レユニオン・コンサート」ニューヨーク、コートハウスでの演奏、1994年

《エンドレス・ボックス》の映像制作に関する覚書

藤井亜紀

はじめに

東京都現代美術館では、2009年度に塩見允枝子の作品31点を収蔵した[註1]。その内容は、60年代に着想されたコンセプトを視覚化したものや、それらを90年代に再解釈したもののほか、CDや楽譜、ヴィデオに及んでおり、いずれも音や言葉、視覚的な要素が渾然一体となっている。このため、通常美術館においては、収蔵作品を「絵画」や「彫刻」等と分類して管理するが、塩見の作品は、そうした区分に当て嵌めることができず、「その他」としか位置づけようがない。また、これらの作品は、複数の領域にまたがるという意味での「インターメディア」にとどまるのではなく、音や言葉、映像、物体が、何らかのルールで、互いに変換可能な総体となっている。さらに、塩見が「トランスメディア」と称しているように、あるメディアによる作品が、そのコンセプトをもとに別のメディアで新たな作品になるといったものも認められる。したがって、塩見の作品は、ひとつの「もの」として閉じられ完結した世界を提示しているのではなく、常に推移し変容する可能性が備わっているといえる。

1　展示

これら塩見の作品を、当館の常設展示「MOTコレクション」において、「クロニクル1964-｜OFF MUSEUM」というテーマの下に紹介した（会期：2012年2月4日―5月6日）。筆者は、2009年度から「クロニクル―戦後日本美術を見直す」というシリーズを企画しており、これはその第3回目にあたる。1964年以降の美術動向が、美術館という既存の建物や展示方法、ジャンルやメディアを根底から問い直す契機を孕んでいたと解釈し、そこに塩見のセクションを設けた。

この1964年に、塩見はニューヨークへ旅立ち、「フルクサス」の一員として新たな活動に踏み出している。その前年のナム＝ジュン・パイクとの出逢いが、塩見の《エンドレス・ボックス》や「アクション・ポエム」（イヴェント）と、ジョージ・マチューナスや「フルクサス」の活動との結びつきを導いたのである。

塩見の作品は、時や場所、バランス、方向、影、重力等をコンセプトとし、それが日常的な体験に根差すゆえに、様々な人による多様な解釈を誘うことで、水の波紋のように大きな拡がりを生むものとなっている。そこには、美術館で分類され、ガラスケースに陳列されて、作家と鑑賞者という固定化された関係性をすりぬけるようなダイナミズムが宿っているにもかかわらず、いざ、それを展示するとなると、既存の展示のボキャブラリーの範囲に収めざるをえないというジレンマが生じてくる。それをわずかでも解消するために、筆者は、作家によるトーク［前掲に採録］やその作品をもとにしたパフォーマンスを企画するほか、《エンドレス・ボックス》を用いた映像を制作することを考えた。

2　《エンドレス・ボックス》

《エンドレス・ボックス》は、徐々に小さくなっていく紙製の箱34個から成っている（図1）。箱はすべて最大のものの中に入れ子状に収まるようになっており、薄紫色の布に包まれて木箱に入れられている。紙の箱は、日本製の全紙2枚を使い、同じ方法で折られている。その色は、蛍光増白剤ゆえか、青みがかった透明感のある白さをたたえており（それは経年劣化によって損なわれてしまうのだろうが）、薄紫色の布と調和している。作品は1963年以降これまでに25セット程度作られているが、すべて作家の手によるものである。

この作品について塩見は、自著で以下のように記している。「透明な音楽、時間の持続だけが聞こえてくるような音楽について考えていました。そして、それを感覚的に捉えるには、音でなくても、ほかにも方法があるのでは……と頭を空っぽにしたとき、ふと、子供の頃に折紙で作っていた箱を思い出したのです。開けても開けても、中に少しずつ小さな箱が、際限もなく入っている箱。いったいどこまで続いているんだろうと、開ける度に、まるで時間の奥へ奥へと分け入っているような感じになる箱。視覚的なディミヌエンドとして、人の意識を集中させ、ある種の肉感をもって時間の持続を感じさせながら、先へ先へと誘う白い立体……これを再現してみようと思い付いたのです。全紙二枚で一セット作れるようにサイズを決め、折るのに必要な柔らかさと張りと丈夫さを持ち、光の加減で白が薄紫色に見える紙を選びました。」[註2]。加えて、そこには、幼い頃に過ごした環境が着想源として大きく関わっているという。夕暮れ時、薄紫の靄が田園地帯に徐々にかかる様子を振り向き見つつ家路に着いたこと、暮れなずむ積藁の上で夕顔の花びらが白く浮き立つように震えていたこと、ピアノが学校にしかない環境で、頭の中で常に弾きたい音を思い描いていたこと[註3]。日々の暮らしのなかの出来事を、塩見が複数の感覚器官で（あるいは全身で）鋭敏に受け止めていたからこそ、インターメディア的な《エンドレス・ボックス》に結実したのだろう。

図1
塩見允枝子《エンドレス・ボックス》1963/1990年、紙箱寸法
13.2×13.2×6.5cm（最大）、0.9×0.9×0.4cm（最小）
東京都現代美術館蔵
撮影：椎木静寧

3　映像の制作

このように《エンドレス・ボックス》は、時間の持続を身体的に感じさせる作品であるが、展示となると、大きさの異なる箱が積み重なった総体として、スタティックな「もの」の様相が強く表される。きわめて単純なつくりの白い紙の箱それ自体の美しさを伝えるものではあるが、静かな時間の流れのなかで行われた視覚的なディミヌエンドは想像のなかにとどめられ、むしろ行為（音楽）が終わった後の状態として残されたものを観ることになる。

そこで、時間的な要素を強調するためにも、また、鑑賞者がイマジナリーな音楽を追体験するためにも、作家によるパフォーマンスを動画で撮影し、その映像を箱とともに展示することを塩見に提案した。そこには、作家の行為を記録しておきたいというアーカイヴ的な関心と、その作家の唯一性に重きを置く態度があった[註4]。

しかし、塩見は、映像にすることに同意は示したが、パフォーマーはむしろアノニマスな手だけのほうがよいのではないかと提案した。作家から離れて作品が自律することを望み、匿名性は「フルクサス」の理念に適うものだとした。作家によるパフォーマンスという、その記録性と唯一性を重視する美術館的な考えではなく、むしろ、作品として新たな展開が拓かれることを望んだのである。それは、塩見の作品が、「フルクサス」のパフォーマンス作品同様、様々な人に解釈され、演奏され、現在形として継続していくことと通じ合うものである。美術館として、その提案に同意したところ、筆者がパフォーマーを務めることになった。

そこで、塩見から映像化にあたって、以下のようなアイディアが提案された。（1）暗闇のなか、フレームには手とテーブルだけがあり、手が出てきて、箱を開けていく。開けた箱はフレームから外し、それを左右順番に繰り返す。最後の一番小さなものを手のひらにのせ、それをテーブルの上に置いて終了する。（2）開けた箱を瀬戸内海の大小の島々のように並べ、積んでいく。（3）連続したパフォーマンスとして難しければ、全体をスティール写真の連続のように（アニメーションにように）或いはコマ落としの映像のように撮影し、後で画像処理する。いずれにしても、《エンドレス・ボックス》を基に、新たに映像作品を作るという「トランスメディア」の観点から、パフォーマンスとその撮影や処理方法を、クリエイティヴに考えることが望ましい、とされた。

撮影は、作家の山城大督が行った[註5]。撮影にあたっては、（1）のアイディアを基本としつつ、手元にアクリル板を置いて映像に深みをもたらすなどの工夫をこらし、時間の流れを強調する点からも、ワンカットで行った。動作については、箱を強調するためにできるだけ無駄を省いた動きを心がけた。箱を開け続けるという行為の連続のなかで、おのずとリズムが生まれ、刹那の連続が永遠の透明な飛躍を生んでいくような貴重な体験をした。出来上がった映像は、箱と併せて展示をした。

4　30世紀の人々へ

塩見が1965年から10年間にわたって地球規模で行った9つのイヴェントを記録した作家の自費出版による冊子『SPATIAL POEM』の巻末には、“dedicated to the people of 30th century”と記されている。それは、地球や人々の営みに対する讃歌とともに、未来の参加者に向けた呼びかけにもなっているのではなかろうか。

塩見のイヴェントのスコアは、例えば、言葉をカードに記し、それをどこかに置く、ものを落とす、閉じてあったものを開く、まわりの音を聞く、など、なにか特別な技能や知識を必要としたり、特定の集団にしか通じないようなものでは決してなく、自然現象や日常のささやかな立ち居振る舞いから生じているために、そこには音と言葉と自然とが融け合い、誰もが自由に行い楽しめる地平が広がっている。

塩見の作品は、美しい風景のなか、音楽好きの両親に育まれ、詩を愛したという出自に由来しながらも、音楽の発生に遡る数多の試行錯誤を経て出逢った「フルクサス」の活動によって、美術や音楽といった分断によるのではない、それらに通底する芸術への志向を開花させたといえよう。根源的で未分化なもののうちに、詩的なるものを見出し、それを「作品」として留め、様々なコミュニケーションを通じて共有することによって、「インターメディア」や「トランスメディア」という新たな回路が拓かれていく。こうした作品は、受け手にとって、時空を超えて未知なるものを感得しうる可能性に満ちたものとなる。そこでは受け手が新たな創造者にもなり、作家も自らの作品の新たな解釈者として、異なったメディアによる試みを持続させていくだろう。塩見の創造は、小さくささやかなものから始まっても、それだけでは完結せずに推移し、イメージの連鎖を伴って存続することで、「エンドレス」なものとなっていく。

美術館が、様々な人の手を経てコレクションを蓄積し展示することによって、未来に向けた歴史を紡いでいくために、ひとつの作品のなかに含まれた時間とそこに積み重なっていく歴史とを、これからも注意深く見つめていく必要があるだろう。

註

1. 詳細は、『平成22年度東京都現代美術館年報｜研究紀要　第13号』を参照。

2. 塩見允枝子『フルクサスとは何か? ―日常とアートを結びつけた人々』2005年11月、フィルムアート社、p.74。

3. 2011年11月16日、塩見宅でのインタビュー。

4. これまでに東京都現代美術館では、菊畑茂久馬が《奴隷系図―貨幣による》を詳細な指示を与えながら展示するさまや、中西夏之が《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》を展示する様子を映像として記録してきた前例があった。

5. 当館で開催した「MOTアニュアル2012　Making Situations, Editing Landscapes 風が吹けば桶屋が儲かる」（企画：西川美穂子、会期：2012年10月27日―2013年2月3日）では、Nadegata Instant Partyとしてその活動が紹介されている。山城自身、フルクサスに高い関心を抱いていたため適任となった。

『美術館ニュース』（東京都美術館発行）　総目次（1）

長谷川菜穂 編

『美術館ニュース』は、東京都美術館が発行した広報機関誌で、昭和26（1951）年1月の1号から平成9（1997）年3月の450号まで月刊で刊行された。その後、発行は東京都現代美術館に引き継がれ、1999年3月まで刊行された。[註1]

この『美術館ニュース』は、1号から123号（昭和36年3月号）までは、美術愛好家有志により結成された友の会が主体となり刊行し、美術界の情勢や東京都美術館（以下、都美と省略）の事業内容を紹介する有料の配布物であった。1号の発刊のことばには「美術館自体としてもここに作家並に鑑賞家の便宜をはかり、且又美術諸団体とふだんの連絡をとり、併せて美術界当面の情勢や当館の事業内容等の紹介のために美術館ニュースを編集刊行することにしました」とある。124号（昭和36年4月号）からは、記事内容に大きな変化はみられないものの、発行に係わる費用が東京都で予算化され、無料で配布されるようになった。

都美では昭和39（1964）年から『東京都美術館要覧』[註2]が発行されるが、要覧が発行されるようになってからも、『美術館ニュース』には、美術団体の動向や各展覧会の入場者数、所蔵作品に関する解説などがたびたび掲載され、現在でいうところの年報や紀要の役割を果たしていた。

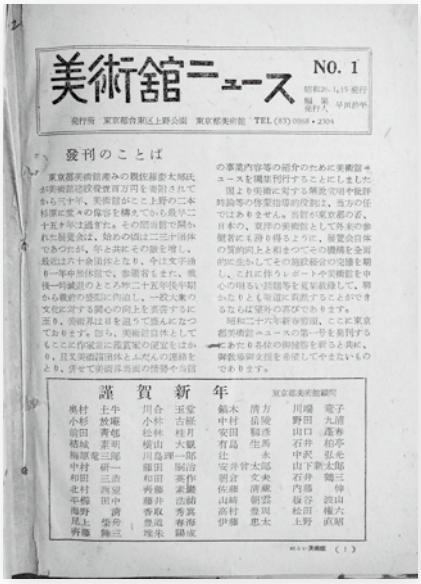
美術図書室では、『美術館ニュース』を全号所蔵している。しかし、これまで総目次は作成されていなかったため、記事内容へのアクセスが充分ではなかった。都美の事業は、戦後の美術界や美術団体の動向と深く関わっている。そのため、そうした事柄についての調査の利便性を向上させることを目的とし、『美術館ニュース』の総目次を順次公開していくことにした。

この総目次で取り上げるのは、都美が発行した1号から450号までである。今回は昭和26（1951）年1月発行の創刊号から昭和30（1955）年12月発行の60号までの目次を掲載する。

註

1. 書誌情報③と④を参照。

2. 1983年から1986年までは『要覧』、1987年からは『東京都美術館年報』に改題。



美術館ニュース　NO. 1

昭和26.1.15 発行

編集・発行人　早川治平

発行所　東京都台東区上野公園　東京都美術館　TEL (83) 0868・2304

發刊のことば

東京都美術館庸みの機佐藤慶太郎氏が美術館建設費壹百万円を寄附されてから弐十年、美術館がここ上野の二本松原に堂々の偉容を構えてから最早二十五ヶ年は過ぎた。その間当館で開かれた展覧会は、始めの頃は二三ヶ団体であつたが、年と共にその数を増し、最近は六十余団体となり、今は文字通り一年中無休館で、参観者もまた、戦後一時減退のときと乃所二十五年後半期から戦前の盛況に再出し、一般大衆の文化に対する関心の向上を裏書するに至り、美術界は日を追うて盛んになつてあります。翻ら、美術団体としてもここに作家並に鑑賞家の便宜をはかり、且又美術諸団体とふだんの連絡をとり、併せて美術界当面の情勢や当館の事業内容等の紹介のために美術館ニュースを編集刊行することにしました。

国より美術に対する無尽奨励や批評時論等の啓蒙指導の役割は、当方の任ではありませんが、当館が東京都の若、日本の、東洋の美術館として外来の参観者にも待ち得るとうに、展覧会自体の質的向上と相まつてその機略を全面的に生かしてその施設拡張の発達を期し、これに伴うレポートや美術館を中心の明るい話題等を寄稿載録して、賜かたりとも幸甚に再出することができるならば望外の喜びであります。

昭和二十六年新春雪頃、ここに東京都美術館ニュースの第一号を発刊するにあたり各位の御協賛を祈ると共に、御教導御支援を希望してやまないものであります。

謹賀新年　東京都美術館職員

飯村	圭牛	川合	玉堂	鈴木	清方	川端	竜子
小杉	放庵	小林	古径	中村	岳陵	野田	九浦
前田	青邨	松林	桂月	安田	靫彦	山口	蓬春
橋本	雅邦	横山	大観	有島	生馬	石井	柏亭
梅原龍三郎		川島理一郎		辻	永	中沢	弘光
中村	研一	藤田	嗣治	安井曾太郎		山下新太郎	
和田	三造	和田	英作	朝倉	文夫	石井	鶴三
北村	西望	斎藤	素巖	佐藤	清眞	内藤	伸
平櫛	田中	藤井	浩祐	山崎	朝雲	長谷	川潤
海野	清	香取	秀眞	高村	豊周	松田	権六
尾上	柴舟	豊道	春海	伊藤	忠太	上野	直昭
斎藤	勝三	座朱	錦成				

NO. 1　美術館　（1）

『美術館ニュース』創刊号表紙

※『美術館ニュース』書誌情報

①出版者
- No.1東京都美術館
- No.2～ No.5東京都美術館友の会
- No.6～ No.9、No.12～ No.21東京都立美術館友の会
- No.10～ No.11東京都立美術館
- No.22～ No.123東京都美術館友の会
- No.124～ No.450東京都美術館

②編集・発行人
- No.1～ No.123早川治平、No.124～ No.150沼沢武彦
- No.151～ No.196岡部敏武、No.197～ No.251今井治夫
- No.252～ No.282植野一男、No.283～ No.286小杉山清
- No.287～ No.318新島武、No.319～ No.342工藤昭和
- No.343～ No.370村上七郎、No.371～ No.384冨永次雄
- No.385～ No.399本江哲郎、No.400～ No.406長尾正平
- No.407～ No.412佐藤好雄、No.413～ No.418信川成正
- No.419～ No.436青山康行、No.437～ No.442村林宗昭
- No.443～ No.450真室佳武

③創刊号数～終刊号数
- No.1～ No.450
- （以後は東京都現代美術館発行となり、0号～1号を刊行。さらにその後は、東京都現代美術館と東京都美術館の共同発行となり、合併1号～7号まで刊行された。）

④刊行頻度
- No.1～ No.362月刊、No.363～ No.440隔月刊
- No.441～ No.450不定期刊

⑤大きさ
- No.1～ No.5 ,No.7：A5判
- No.6：菊判
- No.8～ No.450：B5判

凡例
・本目次は『美術館ニュース』(東京都美術館刊)第1号 (昭和26年1月)から第60号(昭和30年12月)までの各号の総目次である。
・本目次の表記は、原本見出しをもとに作成し、不足箇所を本文からの抜粋などにより、適宜補足した。
・東京都美術館と美術団体の活動に関係する見出しを中心に記した。
・原本見出しに示されておらず、編者が補足した箇所は、見出し、執筆者とも全て[] (角カッコ)で括った。
・本目次では旧漢字は常用漢字に改めたが、旧仮名遣いは原本のままとした。
・図版と写真については必要と思われるもののみ記した。
・挿絵については題名と作者が記載されているもののみ記した。

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.1	昭和26.1.15	発刊のことば		1
		女子監視員の表彰		2
		七人を祝う	高村豊周	3
		茶話会席上の思い出話［受彰者談］		3-4
		初春の展覧会［団体展スケジュール］		4
		美術団体の紹介　水彩連盟・一線美術・東光会		4
		新団体の借館決定		4
		作家消息		4
No.2	昭和26.2.15	講堂設置の弁		1
		近代美術館の誕生		1
		アメリカレポート　サンフランシスコの美術協会と握手		2
		グラフ世界と提携		2
		一月の展覧会受賞者［名簿］		2
		小講堂の完成		2
		高岡に美術館新設		2-3
		美術団体の紹介　日本アンデパンダン展 (読売)・白日会・示現会・日本アンデパンダン展［日本美術会］		3
		二科会の関西公募展		3
		春の展覧会［団体展スケジュール］		4
		会名並に展覧会名の変更［全日本画人連盟］		4
		示現会事務所の変更		4
		作家消息		4
No.3	昭和26.3.15	雪のいたずら　美術館の被害三十五万		1
		美友会の発会式　女子監視員一本立て		1
		美友会長　東出サク女史逝く		2
		モデルさん斡旋協議会		2
		二月の展覧会ノート［各展覧会の概要］		2
		美術団体の紹介　美術文化協会・創元会・光風会・女流画家協会		3
		三・四月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		団体事務所の変更［創芸協会、日本彫刻家連盟］		4
		作家消息		4
No.4	昭和26.4.15	子供美術と国際親善		1
		前館長尾川氏功労表彰　25ヶ年の奉仕をおもう		1-2
		日米交歓第三回子供美術展		2
		戦後の美術館利用団体と入場者［昭和20年度〜25年度］		2
		日月社の研究所誕生		2
		結城素明氏喜寿の祝い		2
		三月の展覧会ノート［各展覧会の概要］		2
		美術団体の紹介　国画会・春陽会		3
		四・五月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		作家消息		4
No.5	昭和26.5.15	尾川前館長の表彰式		1
		二つの美術講演会　彫刻家連盟と春陽会		1
		各地美術館の催しもの		1
		美術館めぐり　高岡市立美術館		2
		染織美術示風会の結成		2
		四月の展覧会ノート［各展覧会の概要］		2
		美術団体の紹介　太平洋画会 (洋・彫)・新構造社 (洋・彫・工・写)・朱葉会 (洋)・創造美術会 (洋・写)		3
		五・六月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		美術館の名称変更［東京都美術館から東京都立美術館へ］		4
		団体事務所の変更［美術文化協会］		4
		作家消息		4
No.6	昭和26.6.15	主催者も観覧者も共に楽しく　せりあいの展覧会打開策は？		1
		近く接収記録画の撤去		1
		美術館めぐり　笠間町立美術館		2
		女監視員の雇用は―規則改正で上野職安へ―		2
		大阪美術館の催しもの		2
		霹靂社に洋画部新設		2
		五月の展覧会ノート［各展覧会の概要］		2
		美術団体の紹介　日本水彩画会 (水・版・パステル)・第一美術協会 (洋)・再興新興美術展 (日)・東陶会 (工)		3
		六・七月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		個人消息		4

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.7	昭和26.7.15	美術館友の会の発足		1
		美術館参与会		1
		美術館めぐり　徳川美術館		2
		美術館内で水彩連盟主催の講習会		2
		美術懇談会［都教育委員会主催］		2
		ブリヂストン・ギャラリーの計画		2
		第七回日展審査員［名簿］		3
		第七回日展　出品依嘱者と無鑑査［名簿］		3-4
		東京近郊の美術名所　その一	中西芳朗	4
		美友会会長に市川女史		4
		六月の展覧会ノート［各展覧会の概要］		5
		美術団体の紹介　朔日会（洋）・職場美術（日・洋・彫・工・写）・全日本画人連盟（日）		5
		七・八月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		寄贈図書		6
		作家消息		6
No.8	昭和26.8.15	作家と生活	大河内信敬	1
		日本画の鑑賞	望月春江	1
		太平洋［画会］自主連立［展］より脱会		2
		水彩連盟夏の講習		2
		モデル斡旋所の創設		2
		徳川美術館の催しもの		2
		第七回日展　出品依嘱者と無監査（続）［名簿］		2
		東京近郊の美術名所２	中西芳朗	3
		美術館めぐり　本間美術館		3
		八・九月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		団体事務所の変更［新制作派、創元会］		4
		作家消息		4
		美術団体の紹介　院展（日）		4
		寄贈図書　8月号		4
No.9	昭和26.9.15	美術家の優遇		1
		洋画の鑑賞	向井潤吉	1
		美術館めぐり　神奈川県立近代美術館	石野隆	1-2
		板谷波山氏の栄誉　下館市から名誉市民の称号		2
		各地美術館の催しもの		2
		九月号寄贈図書		2
		東京近郊の美術名所３	中西芳朗	3
		九・十月の展覧会［団体展スケジュール］		4
		作家消息		4
		美術界の催し		4
		9月展覧会ノート［各展覧会の概要］		4
No.10	昭和26.10.15	近代美術館の敷地		1
		彫刻の見方	山本豊市	1
		美術館めぐり　高松美術館		1-2
		竹の台今昔	野間仁根	2
		美術館顧問会		2
		各地美術館の催しもの		2
		記念展		2
		博物館のニュース		3
		第7回日展はじまる		3
		科学と芸術	塩見俊治	4
		美術団体の紹介　二科会（洋・彫・工・商・漫）		4
		美術館一ヶ年の展覧会［昭和25年度下半期から昭和26年度上半期までに開催された展覧会の種別と数］		4
		新刊の紹介		4
		東京近郊の美術名所４	中西芳朗	5
		十・十一月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		新制作協会の発足		6
		9・10月展ノート［各展覧会の概要］		6
		作家消息		6
		団体事務所の変更［太平洋画会］		6
		寄贈図書10月		6
No.11	昭和26.11.15	美術館の美化	佐藤祐豪	1
		書の見方	金子鷗亭	1-2
		美術館めぐり　別府市美術館		1
		第七回日展ひらく［受賞者名簿］		2
		写真：日展に搬入された彫刻群　高林写真館撮影		2
		日展搬入、入選、及陳列数		2
		美術館新参与		2
		和田・三宅・中澤三画伯喜寿のお祝い		2
		海外美術の動き	中村恒夫	3
		各地の美術館と博物館		3
		上野公園に彫刻　清水多喜示氏の作品		3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		美術の秋　放送		4
		独立展の大祝宴　創立20周年		4
		美術団体の紹介　独立美術協会（洋）・第二紀会（洋・造型）		4
		美術界の催し		4
		東京近郊の美術名所５	中西芳朗	5
		十一・十二月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		10月展ノート［各展覧会の概要］		6
		作家消息		6
		寄贈図書		6
		事務室の記録点描（10-11月）		6
No.12	昭和26年12.15	上野公園と美術館		1
		26年の洋画界	三村英一	1-2
		美術館めぐり　茨城県立美術館		1
		新参与会議		2
		美術館南側敷地問題		2
		結城素明氏喜寿の祝い		2
		各地の美術館		2
		美術界の催し		2
		東京近郊の美術名所６	中西芳朗	3
		全日本画人講習会		3
		十二・一月展覧会［団体展スケジュール］		4
		作家消息		4
		事務室点描（11-12月）		4
		日展作品東京都で買上げ［リスト］		4
No.13	昭和27年1.15	年のはじめに		1
		講和成立の春に佐藤氏を懐う	西澤苗畝	1-2
		写真：佐藤慶太郎氏		1
		美術研究所めぐり　阿佐ヶ谷洋画研究所		1
		随筆　青い壺	白川一郎	2
		随筆　タアイモナイ絵	上田桑鳩	2-3
		海外美術の動き	中村恒夫	3
		博物館美術館レポート		4
		美術界の催し		4
		二本杉原問題解決		4
		美術団体の紹介　大潮会（洋・日・水）・勤労美術（日・洋・彫・工・書）・書壇院（書）・書道教育学会（書）		4
		神奈川県立美術館みたまま		5
		一月・二月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		都立美術館の正式接収解除		6
		事務室点描（12月）		6
		個人消息		6
		寄贈図書		6
No.14	昭和27年2.15	ブリヂストン美術館の開始	杉山司七	1
		ブリヂストン美術館の開始	団伊能	1-2
		写真：ブリヂストン・ギャラリーの陳列室		1
		美術研究所めぐり２　行動美術研究所		1
		石川県にも美術館　建設促進同盟できる		2
		国立美術館は京橋へ		2
		日本画院友の会　前橋にできる		2
		アメリカ絵画展［於：国立博物館］　1月24日〜2月24日		2
		矢澤弦月氏逝く		2
		豊道春海氏大字揮毫　和平をたたえる		3
		写真：美術館彫刻室で大字揮毫をする豊道春海氏		3
		随筆　肖像画	白川一郎	3
		佐藤翁十三回忌　盛大に施行		3
		博物館美術館レポート		3
		美術界の催し		3
		新年会さまざま［日本美術院・美術館参与会・旺玄会・日本書道美術院］		4
		石井柏亭氏古希の祝い		4
		東京近郊の美術名所７　谷保天満宮	中西芳朗	5
		新刊紹介		5
		二月・三月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		作家消息		6
		事務室点描（12月-1月）		6
		寄贈図書		6
No.15	昭和27年3.15	北陸地方の美術館　夢を現実に・・先ず建設を	嘉門安雄	1
		美術研究所めぐり２　青山絵画研究所		1
		ブリヂストン・ギャラリィー　見学会		2
		博物館美術館レポート		2
		美術界の催し		2
		東京近郊の美術名所８　普斉寺	中西芳朗	3
		三月・四月の展覧会［団体展スケジュール］		4

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		団体名及び事務所の変更［国画会、大日本書芸院］		4
		個人消息		4
		事務室点描（2月）		4
No.16	昭和27年4.15	美術の精神的風土	外山卯三郎	1
		皆さん画を描いて下さい	猪熊弦一郎	1-2
		美術研究所めぐり４　公認学校蕨画塾		1
		美術館レポート		2
		美術界の催し		2
		美術館顧問及び参与会		2
		石井柏亭氏の古稀祝賀会		2
		海外美術の動き　レオナルド・ダ・ヴィンチ　生誕五百年祭	中村恒夫	3
		図版：「ユダの頭部」習作　英国ウィザー宮所蔵		3
		図版：「キリスト洗礼」の部分　フィレンツェ・アカデミア所蔵		3
		図版：「岩窟の聖母」の部分　パリ、ルーヴル博物館所蔵		3
		鑑賞講座　群像画の話（一）	田中忠雄	4-5
		日本芸術院の授賞者［名簿］		5
		四月・五月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		団体事務所の変更［日本美術家連盟］		6
		個人消息		6
		事務室点描（3月）		6
No.17	昭和27.5.15	こんな施設を	西沢苗畝	1
		美術研究所めぐり５　文京絵画研究所		1
		国際親善第四回子供美術展　外国の作品192		2
		写真：子供美術展の審査風景		2
		京都美術館の接収解除		2
		美術館レポート		2
		美術界の催し		2
		海外美術の動き　昨今の欧米画壇	中村恒夫	3
		都立美術館の新計画		3
		鑑賞講座　群像画の話（二）	田中忠雄	4
		昭和26年度芸能選奨授賞者［名簿］		4
		東京近郊の美術名所９　目黒の五百羅漢	中西芳朗	5
		五月・六月の展覧会［団体展スケジュール］		6
		個人消息		6
		事務室点描（4月-5月）		6
No.18	昭和27.6.15	相つぐ国際美術展		1
		美術研究所めぐり６　職美協・中央美術研究所		1
		国際美術展ひらく		2
		図版：静物　クロード（英）		2
		図版：プロフィル　ルオー（仏）		2
		図版：魚　ベン・ニコルソン（英）		3
		国際美術協会の設立　パリへ大量の洋画出品		2
		国学院大学に研究会		2
		水彩連盟の夏期講習　美術館で［募集］		2
		美術館参与会　今年度秋の会場割当を決定		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き	中村恒夫	3
		鑑賞講座　風景画の話	松本姿水	4
		美術界の催し		4
		4・5月展ノート［各展覧会の概要］		5
		美術名所めぐり 10　杉本坊塩船観音	中西芳朗	6
		随筆　美術館への道	仲田好江	6
		六月・七月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体掲示板［自由美術協会、大日本美術院］		8
		事務室点描（5月）		8
		個人消息		8
No.19	昭和27.7.15	美術と生活	山崎覚太郎	1
		美術研究所めぐり７　光風会美術研究所		1
		芸術院の授賞式　6月25日上野の学士院で［名簿］		2
		写真：芸術院賞の中山巍氏		2
		写真：恩賜賞の白滝幾之助氏		3
		日展参事の改選		2
		第八回日展規則		2
		箱根美術館の新設		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き	中村恒夫	3
		鑑賞講座 着物芸術論（1）　着られないきものとは	長澤節	4
		美術界の催し		4
		第八回日展の審査員　新人は29名［名簿］		6
		5・6月展ノート［各展覧会の概要］		6
		随筆　寸言	山崎節堂	6

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		新刊紹介		7
		七・八月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		事務室点描（6月）		8
		個人消息		8
No.20	昭和27.8.15	モダンアート理解への通路	外山卯三郎	1
		美術研究所めぐり 8　東京美術研究所		1
		平和記念のための日本現代美術米国展		2
		いよいよ開かれた箱根美術館		2
		写真：新装なった箱根美術館		2
		日本書道　アメリカへ渡る		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き	中村恒夫	3
		鑑賞講座 人形芸術論（2）　それならば着られない着物は一体どんなものでどんな風にして生れたか	長澤節	4
		美術館で夏期美術大学［友の会・造形美術共催］　モダンアートの探求		4-5
		写真：夏期大学　阿部教室		4
		写真：夏期大学　川口教室		5
		美術界の催し		4
		階段と壁面の新設　東京都立美術館の改造		5
		東京都立美術館の入場者数　昭和22年〜26年		5
		第八回日展の審査員［名簿］		5
		第八回日展出品依嘱者［名簿］		6
		第八回日展無鑑査［名簿］		6
		美術名所めぐり 11　大悲願寺	中西芳朗	7
		八・九月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		事務室点描（7月）		8
		個人消息		8
No.21	昭和27.9.15	美術館の提携		1
		美術研究所めぐり 9　田園調布純粋美術研究室		1
		京都美術館の再発足		2
		徳島県にも美術館		2
		都内に新研究所　光風会館の経営		2
		原爆乙女に贈る　肖像画の会		2
		二科入場者に色紙		2
		東京都立美術館の入場者数　開館から昭和26年		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き 8	中村恒夫	3
		鑑賞講座 人形芸術論（3）　人間は、愛するときに生きていても物になるということ	長澤節	4
		美術界の催し		4
		随筆　筆談笑話	長谷川耕南	5
		7・8月展ノート［各展覧会の概要］		5-6
		新刊紹介		6
		美術名所めぐり 12　赤門・黒門・習静門	中西芳朗	6-7
		九・十月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		事務室点描（8月）		8
		個人消息		8
No.22	昭和27.10.15	古美術保存施策について		1
		美術研究所めぐり 10　太平洋美術研究所		1
		小住宅展覧会場へ　美術館の彫刻室に		2
		写真：彫刻室の小住宅　新制作展		2
		博物館80周年式典［国立博物館］		2
		都民の日の美術展		2
		全国美術館協議会		2
		五紙協議会の結成		2
		高岡市美術館長決定		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き 8	中村恒夫	3
		鑑賞講座　書の観方と習い方　運筆の方勢と円勢	石橋犀水	4
		美術界の催し		4
		美術の季節	井上長三郎	5
		8・9月展ノート［各展覧会の概要］		5
		美術名所めぐり 13　上野の巻	中西芳朗	6
		石川寅治氏喜寿の祝		6
		十・十一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体掲示板［美術文化協会、示現会］		8
		事務室点描（9月）		8
		個人消息		8
No.23	昭和27.11.15	作家の苦心　鑑賞のよすがとして		1-2
		美術研究所めぐり 11　寛永寺坂美術倶楽部		1
		文化勲章にかがやく　梅原・安井両画伯		2
		第八回日展ひらく　秋の最後をかざる［搬入・入選・陳列数］		2
		第八回日展授賞者［名簿］		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		秋の参与会		2
		美術館レポート		2
		海外美術の動き 9	中村恒夫	3
		鑑賞講座　人物画について	岩田正巳	4
		美術界の催し		4
		都立牧野美術館	小林喜代吉	5
		9・10月展ノート［各展覧会の概要］		5
		染織工芸界の廣川松五郎氏急逝		5
		美術館顧問　堆朱楊成氏の逝去		5
		美術名所めぐり 14　上野の巻　つづき	中西芳朗	6
		石川寅治氏喜寿の祝		6
		美術懇話会発足		6
		十一・十二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		事務室点描（10月）		8
		個人消息		8
No.24	昭和27.12.15	昭和27年を顧みる		1-2
		美術研究所めぐり 12　東山女子絵画研究所		1
		全国美術館協議会ひらかる　東京都美術館で［出席者名簿］		2
		写真：全国美術館協議会場		2
		海外美術の動き 10	中村恒夫	3
		鑑賞講座　人物画について（2）	岩田正巳	4-5
		美術館・美術界レポート		4
		谷中研究所の思い出　ランプを燈もして勉強した	朝倉文夫	6
		石川寅治氏喜寿の祝　非常な賑わい		6
		十二・一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		事務室点描（11月）		8
		個人消息		8
No.25	昭和28.1.15	創造への祝福	外山卯三郎	1-2
		写真：東京都美術館正面		1
		国立近代美術館を見る		1
		写真：国立近代美術館		2
		世界の美術館展望 1　ルーブル博物館の話	中村恒夫	3-4
		写真：ルーブル博物館の外観		3
		写真：ルーブルの内部　アポロン画廊		4
		ロンドンへゆく彫刻		4
		年末の連盟展盛況		4
		新刊のご紹介		4
		初心者への美術講座　油絵（1）	楢原健三	5
		画家の集い　研究会エスプリ誕生		5
		近郊の写生地　房総半島	近藤洋二	6
		新春・美術館・雑語	石野隆	6-7
		随筆　身辺雑記	森田元子	7
		一・二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体掲示板［前衛美術会］		8
		事務室点描（12月）		8
		個人消息		8
No.26	昭和28.2.15	生活のコンポジション	阿部展也	1
		高知県に美術館　建設の声あがる		2
		美術研究所二つ　2月1日より　春陽会美術研究所、アドバンス美術研究所		2
		山下・有島両画伯　古希のお祝		2
		佐藤記念室　印象派絵画複製展　いよいよひらく		2
		春潮会展		2
		美術街頭録音［ラジオ公開録音］		2
		美術館レポート		2
		世界の美術館展望 2　ウフィチ画廊（フロレンス）その他	向井潤吉	3-4
		図版：ヴィナスの誕生（ウフィチ画廊）		3
		写真：ウフィチ画廊へつづくベッキヨ橋		4
		恩賜賞と芸術院賞　昭和27年度［名簿］		4
		美術界の催し		4
		初心者への美術講座　油絵（2）	楢原健三	5
		戦没日本人の碑		5
		新刊のご紹介		5
		近郊の写生地　梅林	近藤洋二	6
		十二・一月都美術館　展覧会ノート［各展覧会の概要］		6
		大下［正男］・岡［鹿之助］両氏渡欧		6
		二・三月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体告知板［光風会、水彩連盟、日本画院］		8
		都で美術品買上げ［リスト］		8
		個人消息		8
No.27	昭和28.3.15	暖かい美術館	宇野俊郎	1-2
		美術館めぐり 5　滋賀県立産業文化館		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		福岡県に文化会館		2
		日本彫刻家クラブ発足		2
		佐藤記念室の開設　印象派絵画複製展　3月15日〜4月30日		2
		美術界の催し		2
		世界の美術館展望３　ミュゼ・カルナヴァレ	高野三三男	3-4
		写真：ミュゼ・カルナヴァレ		3
		写真：グウジョン作彫刻の内庭		4
		北村西望氏の大アトリエ完成		4
		大阪に平和記念像　美交社の寄贈		4
		一・二月展覧会ノート［各展覧会の概要］		4
		初心者への美術講座　油絵（3）	楢原健三	5
		近郊の写生地　春の巻（1）	近藤洋二	6
		水彩連盟の講演会		6
		上野公園今昔物語１　美術館の敷地	妹尾勇吉	6-7
		三・四月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.28	昭和28.4.15	現代の水彩画	春日部たすく	1-2
		美術館めぐり６　大阪市立美術館		2
		佐藤記念室の招待日　にぎやかだった		2
		写真：佐藤記念室の招待日風景		2
		美術館ノート		2
		世界の美術館展望４　スペイン　マドリッド　プラド美術館	宮本三郎	3-4
		写真：プラド美術館前の宮本三郎氏夫妻　うしろはヴェラスケスの銅像		3
		図版：ヴェラスケス作　ラス・メニナス		4
		絵かきの望み　美術館へ	森芳雄	4
		美術界の催し		4
		初心者への美術講座　水彩画（1）	萩野康兒	5
		近郊の写生地　春の巻（2）	近藤洋二	6
		上野公園今昔物語　2	妹尾勇吉	6-7
		四・五月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.29	昭和28.5.15	アメリカの美術館	寺田竹雄	1-2
		美術館めぐり７　京都市美術館		1
		在外公館へ　日本画		2
		青空パーティー　新聞美術記者会の主催		2
		恩賜賞及び院賞　受賞式		2
		都美術館内の催し［春陽会30周年記念講演会等］		2
		美術館レポート		2
		世界の美術館展望５　イギリスの美術館	中村恒夫	3-4
		図版：レオナルド・ダ・ヴィンチ「岩窟の聖母」ロンドン・ナショナル・ギャラリー		3
		臨時参与会		4
		上野公園今昔物語３	妹尾勇吉	4
		美術界の催し		4
		初心者への美術講座　水彩画（2）	萩野康兒	5
		近郊の写生地	近藤洋二	6
		上野の山の京成駅　5月1日より復旧		7
		東南アジアの公務員　25名で美術館見学		7
		五・六月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体告知板［モダンアート協会、一線美術、画人連盟］		8
		個人消息		8
No.30	昭和28.6.15	上野公園の近代的美化は不可能か　公園の今昔を顧みて	黒田鵬心	1-2
		美術館めぐり８　日本民芸館		1
		静岡県に美術会館　来年3月完成		2
		彫刻の創型会誕生		2
		美術館レポート		2
		世界の美術館展望６　北欧の美術館　ノルエー、オスロ、スエーデン、ストックホルム	石井明	3-4
		写真：ストックホルムのノルデスカミューゼアム		3
		三人の画家の死　ラウル・デュフィ、モーイズ・キスリング、国吉康雄		4
		常任参与会		4
		美術界の催し		4
		初心者への美術講座　水彩画（3）	萩野康兒	5
		恩賜賞・院賞　日本芸術院の受賞者［受賞者略歴］		6
		写真：恩賜賞の石川寅治氏		6
		六・七月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.31	昭和28.7.15	再び上野公園の美化について		1
		第九回日展審査員［名簿］		2
		水彩連盟で講習　都美術館内で		2
		美術館レポート		2
		世界の美術館展望７　ニューヨーク　メトロポリタン美術館	中村恒夫	3-4
		写真：メトロポリタン美術館		3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		上野公園今昔物語４	妹尾勇吉	4
		ベルナールの舞踏　都美術館玄関右壁装飾	黒田鵬心	4
		美術界の催し		4
		美術講座　モダンアートの理解（1）	村井正誠	5-6
		七・八月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.32	昭和28.8.15	創作の観点	石井明	1-2
		日本アブストラクト　アート・クラブの発足		2
		井伊大老記念館		2
		長府の博物館		2
		石膏デッサンの研究　光風会館夏の催し		2
		第九回日展の出品規約		2
		随筆　夏の高原　笹ヶ峰牧場	鈴木栄二郎	3
		野の花	望月春江	3-4
		アマチュアの画家　うまくなるコツ	布施信太郎	4-5
		美術界レポート		4
		美術講座　モダンアートの理解（2）	村井正誠	5-6
		八・九月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.33	昭和28.9.15	美術館と大衆	高村豊周	1-2
		不同社結成　日本画の団体		2
		テレビ　美術館へ　二科会審査風景		2
		美術館レポート		2
		世界の美術館展望８　ヴェニスの美術館	中村恒夫	3-4
		図版：カルパッチョ筆「聖ウルスーラ物語」（部分）アッカデミーア蔵		3
		写真：アッカデミーア前から見た大運河		4
		美術界の催し		4
		日本美術家連盟　都美術館内へ移転		4
		全国美術館幹事会		4
		美術講座　モダンアートの理解（3）	村井正誠	5-6
		原爆乙女に贈る　行動展の肖像揮毫		6
		写真：行動展で肖像をかく		6
		新刊紹介		6
		フランス　モード写真展　東京都美術館　佐藤記念室で		7
		九・十月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.34	昭和28.10.15	美術館の下足預りについて	杉山司七	1-2
		ルオー展ひらく　10月1日〜11月10日		2
		世界の学童展　日本ユネスコ美術教育		2
		館内に蛍光灯　今明二ヶ年がかり		2
		フランス　モード写真展　盛会裡に終る　美術館佐藤記念室で		2
		世界の美術館展望９　ヴェニスの美術館	中村恒夫	3-4
		写真：セツテチエント美術館の前景		3
		図版：コルレル博物館蔵　G・ベルリーニ筆大統領像		4
		テレビ放送　日展の審査風景		4
		日展の搬入風景		4
		美術館レポート		4
		美術界の催し		4
		顧問・参与会の開催　美術館後援会		4
		美術講座　流行色を把える（1）	三原色生	5-6
		開業30周年　壺中居の特別展		6
		額絵の焼付　新制作展のサーヴィス		7
		十・十一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体告知板［太平洋画会］		8
		個人消息		8
No.35	昭和28.11.15	日本の水彩画界	細島昇一	1
		ルオーと近代　自由美術で討論会		2
		文化勲章に輝く　板谷、香取両氏		2
		第九回日展記録［搬入・入選・陳列数］		2
		第九回日展受賞者［名簿］		2
		世界の美術館展望 10　フィレンツェの美術館（第一回）　ウッフィツィ美術館	中村恒夫	3-4
		図版：春　ボッティチェルリ作		3
		美術界レポート		4
		日展作品買入れ　文部省で［リスト］		4
		美術講座　流行色を把える（2）　色彩感情について	三原色生	5-6
		全国美術館会議　京都市美術館で		6
		参与会		7
		十一・十二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.36	昭和28.12.15	今年の日本画	泉与志	1-2
		朝倉彫刻塾の設立　朝倉文夫氏の美挙		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		美術家同士の扶けあい　年末連盟展		2
		日展へ天皇陛下行幸		2
		世界の美術館展望 11　フィレンツェの美術館（第二回）　ウッフィツィ美術館	中村恒夫	3
		図版：聖家族　ミケランゼロ作		3
		図版：カルデリーノの聖母　ウッフィツィ美術館蔵　ラファエル作		4
		美術界レポート		4
		博物館大会ひらく		
		美術講座　流行色を把える（完）　二つの調和美	三原色生	5-6
		工芸家一堂に集る　板谷・香取両氏の祝賀		6
		吉田首相美術館へ		6
		国立近代美術館開館一周年の催し		6
		美術教育の研究会		6
		新制作協会事務所の変更		6
		日展の鑑賞会		7
		十二・一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.37	昭和29.1.15	我が画界に必要なもの	中野和高	1
		都下の民芸巡歴 1　獅子舞の由来	中西芳朗	1-2
		写真：獅子舞		1
		松方コレクションのフランス美術館新設　来年度着工の運び		2
		日本芸術院新会員の決定		2
		宮本氏の肖像画会		2
		美術映画の制作　ブリヂストン美術館で		2
		国際造形芸術連盟　日本委員会の誕生		2
		世界の美術館展望 12　フィレンツェの美術館（第三回）　ピッティ美術館	中村恒夫	3-4
		写真：ピッティ美術館		3
		図版：椅子のマドンナ　ラファエル作		4
		新設の博物館 1　戦後より現在まで		4
		美術講座　版画について	橋本興家	5
		随筆　放庵の“陣中詩篇”など	木村重夫	6
		片片追想	藤野龍	6
		美術界レポート		7-8
		一・二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.38	昭和29.2.15	華道のゆくえ	藤原幽竹	1-2
		都下の民芸巡歴 2　田遊祭	中西芳朗	1-2
		写真：田遊祭の実況		1
		佐藤翁を偲ぶ会		2
		毎日美術賞の決定［名簿］		2
		辻永氏　古稀の祝い		2
		蛍光灯の設備　美術館の講堂に		2
		美術館のガラス　大雪で破損		2
		写真：雪の日の美術館		2
		世界の美術館展望 13　ワシントン国立美術館	嘉門安雄	3-4
		図版：「アルパのマドンナ」ラファエル作		3
		図版：「愛人」ピカソ作		4
		新設の博物館 2　戦後より現在まで		4
		美術界レポート		4
		美術講座　版画について（2）	橋本興家	5
		芸術院会員　香取秀真氏逝去		6
		二・三月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.39	昭和29.2.15	松方美術館は上野に	小塚新一郎	1-2
		都下の民芸巡歴 3　車人形	中西芳朗	1-2
		写真：実演中の車人形		1
		小山正太郎作　上野の山の鉛筆画　石井柏亭氏より寄贈		2
		初期イタリー絵画　複製展ひらく　美術館の佐藤記念室で		2
		松園賞決定　「小倉遊亀氏へ」		2
		光風会の四十周年　記念行事の計画		2
		世界の美術館展望 14　メトロポリタン美術館	嘉門安雄	3-4
		写真：メトロポリタン美術館の正面		3
		図版：女の闘牛士　マネ作		3
		写真：買入れたヴィナス像		4
		写真：美術館前の嘉門氏		4
		美術界レポート		3
		新設の博物館 3　戦後より現在まで		4
		美術講座　版画について（完）	橋本興家	5
		光陽会の結成		5
		極東オリンピック　芸術競技参加作品		5
		随筆　絵というものの対照	山口薫	6
		まなづる早春　写生地ご紹介	鈴木栄二郎	6-7

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		美術団体告知板［女流画家協会、一線美術展］		7
		三・四月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.40	昭和29.4.15	生活と美	二瓶一次	1-2
		都下の民芸巡歴 4　鹿島踊り	中西芳朗	1-2
		写真：鹿島踊りの実況		1
		名誉県民に推挙　大観・波山の両氏		2
		恩賜賞に沼田一雅氏　芸術院賞に輝く五氏［名簿］		2
		松方コレクション　フランス美術館新設		2
		初期イタリー絵画　複製展　4月15日〜5月15日		2
		東京都美術館の顧問・参与会ひらく		2
		美術館の残置作品　至急引き取ってほしい		2
		伊東忠太氏逝去		2
		世界の美術館展望 15　ボストン美術館	嘉門安雄	3-4
		写真：ボストン美術館全景		3
		図版：ルーランの肖像　ゴッホ作		3
		写真：キオス島出の「少女の首」		4
		美術界レポート		3
		新設の博物館（4）　戦後より現在まで		4
		美術講座　静物画（1）	田原輝夫	5
		図版：静物　ブラック作		5
		随筆　モダーンという語感	山口薫	6
		春の太海　写生地ご紹介 2	鈴木栄二郎	6-7
		四・五月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体告知板［国画会］		8
		美術館器具借用料の改正		8
		個人消息		8
No.41	昭和29.5.15	生活と美の創造	木下幹一	1
		都下の民芸巡歴 5　神田ばやし	中西芳朗	1-2
		写真：神田ばやしの風景		1
		北村西望氏の大作　平和祈念像		2
		写真：西望氏とその巨像		2
		日本二十六聖人の壁画　5年の精進実る		2
		葵会の結成　堂本尚郎等八氏で		2
		新式装置のギャラリー　高島屋のホール		2
		伊原宇三郎氏をねぎらう会		2
		世界の美術館展望 16　フィラデルフィアー美術館	嘉門安雄	3-4
		写真：フィラデルフィアー美術館全景		3
		図版：マチスのダンス		3
		図版：鳩を抱く子供　作者不明		4
		美術界レポート		4
		新設の博物館（5）　戦後より現在まで		4
		美術講座　静物画（2）	田原輝夫	5
		図版：静物　セザンヌ作		5
		随筆　美術と環境（1）	松田義之	6
		五・六月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.42	昭和29.6.15	今日の洋画	和田新	1
		都下の民芸巡歴 6　浦安の舞　水上舞	中西芳朗	1-2
		写真：浦安の舞		1
		日展の役員きまる［名簿］		2
		都美術館の新顧問		2
		太平洋画会展に記念室　旧会員の作品集まる		2
		世界の美術館展望 17　ヘーグとアムステルダム	嘉門安雄	3-4
		写真：ヘーグ国立美術館		3
		図版：ユダヤの花嫁　レンブラント作		3
		写真：アムステルダム国立美術館		4
		新しくできた美術研究所（日曜版画研究会、青山美術研究所、豊島絵画研究所、行動美術東京研究所）		4
		美術界レポート		4
		美術講座　静物画（3）	田原輝夫	5
		新設の博物館（終）　戦後より現在まで		5
		重なる美術家の不幸［物故記事］		6
		六・七月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.43	昭和29.7.15	美術館創立の三十周年（明年）に際して　出資者・故佐藤慶太郎翁を偲ぶ	豊道春海	1-2
		都下の民芸巡歴 7　雅楽	中西芳朗	1-2
		写真：雅楽		1
		三宅克己氏逝去		2
		第十回日展審査員決る［名簿］		2
		東京都美術館に後援会　会長に高橋誠一郎氏		3
		写真：会長　高橋誠一郎氏		3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		写真：副会長　天本淑朗氏		3
		写真：副会長　有光次郎氏		3
		写真：副会長　松林桂月氏		3
		美術界レポート		3
		世界の美術館展望 18　インドの美術館	阿部展也	4-5
		写真：ポンペイ美術館全景		4
		美術講座　風景画（1）	吉岡憲	5-6
		夏の赤城山　写生地ご紹介	島野重之	6-7
		上野へ　池田屋敷表門　国立博物館へ		7
		七・八月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		美術団体告知板［創造美術会、国画会、青甲社］		8
		個人消息		8
No.44	昭和29年8月15日	東京都美術館後援会の発足に際して	石井柏亭	1-2
		写真：後援会披露式　祝辞をのべる安井東京都知事		1
		写真：後援会披露式　発足を祝っての小宴		2
		都下の民芸巡歴８　檜原村の式三番	中西芳朗	1-2
		朝野の名士に賑わった　後援会の披露式		2
		写真：控室　向かって左から朝倉文夫氏、挨拶する佐藤興助氏と窪寺東京都議会議長、その奥高橋会長		2
		世界の美術館展望 19　ソヴエトの美術館	本郷新	3-4
		写真：エルミタージュ美術館の内部　左手前は筆者		3
		写真：ロシア美術館の内部　向かって右は筆者		4
		日本美術家連盟　五周年記念のお祝い		4
		水彩連盟の夏期講習		4
		新刊二種		4
		美術界レポート		4
		美術講座　風景画（2）	吉岡憲	5
		美術と環境（2）	松田義之	6
		八・九月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		富田温一郎氏逝く		8
		個人消息		8
No.45	昭和29年9月15日	友の会のあり方　友の会三周年にあたり	杉山司七	1-2
		都下の民芸巡歴９　鳳凰の舞	中西芳朗	1-2
		写真：鳳凰の舞		1
		原爆乙女におくる　肖像画の会		2
		世界の美術館展望 20　ギリシャの美術館	中村恒夫	3-4
		写真：アテネのパルテノン		3
		第3回全国美術館会議　京橋ブリヂストン美術館で		4
		写真：第3回全国美術館会議場の一部		4
		美術界レポート		4
		美術講座　風景画（3）	吉岡憲	5-6
		「黒潮会」の結成		6
		青竜社地方展		6
		新しい彫刻台設備		6
		写真：新しくできた彫刻台		7
		新制作一水会の美挙　都民の日に		7
		新刊紹介		7
		九・十月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.46	昭和29年10月15日	近代の美	猪熊弦一郎	1-2
		写真：［猪熊弦一郎氏］		1
		都下の民芸巡歴 10　里神楽	中西芳朗	1-2
		写真：お伽神楽桃太郎の一場面		1
		後援会理事会		2
		近代画家の教室（1）　ユージェーヌ・ドラクロア	霜田静志	3-4
		図版：アルジェリアの女		3
		図版：ダンテとヴィルジール		4
		展観されたルーヴルのフランス美術展　国立博物館で		4
		新制作で映画		4
		自由美術で公開研究会　都美術館講堂で［告知］		4
		美術講座　風景画（4）	吉岡憲	5-6
		美術界レポート		7
		十・十一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.47	昭和29年11月15日	画家の自信　前田寛治のこと	外山卯三郎	1-2
		都下の民芸巡歴 11　ヨイサカ踊	中西芳朗	1-2
		写真：ヨイサカ踊の実演		1
		マチス逝く		2
		鏑木氏に文化勲章		2
		近代画家の教室（2）　エドアール・マネ	霜田静志	3-4
		図版：草上の食事		3
		図版：露台		4

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		第十回日展記録［搬入・入選数、受賞者名簿］		4
		日展の催し		4
		美術館の参与会		4
		美術界レポート		4
		美術講座　人物画（1）	森芳雄	5
		美術講座　風景画（完）	吉岡憲	6
		日展作品買入れ　川合資金で［リスト］		6
		十一・十二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.48	昭和29年12月15日	貞観園と苔庭　手厚い美術の保護	郷倉千靭	1-2
		都下の民芸巡歴 12　御獄神社の太神楽	中西芳朗	1-2
		写真：太神楽の実況		1
		物故作家の法要　日展十周年記念行事		2
		写真：日展物故作家の供養		2
		一年間の美術館　開いた展覧会		2
		近代画家の教室（3）　クロード・モネ	霜田静志	3-4
		図版：睡蓮		3
		図版：夏		4
		美術界レポート		4
		辻永氏のお祝い　古稀と万花譜の出版		4
		時事の秋陽展　多彩な小品ならぶ		4
		美術講座　人物画（2）	森芳雄	5
		賀状は是非版画で	平塚運一	6
		写真：［賀状3点　平塚運一作］		6
		鈴木栄二郎追悼集		7
		第6回年末連盟展		7
		十二・一月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		作家消息		8
No.49	昭和30年1月15日	昭和30年を迎えて		1-2
		挿絵：元旦の阿蘇　田崎広助　作		1
		年頭雑感	大河内信敬	2-3
		近代画家の教室（4）　ポール・セザンヌ	霜田静志	3-4
		図版：サン・ヴクトアール山		3
		図版：水浴婦人図		4
		盆栽展へ　高松宮お成り		4
		美術講座　人物画（完）	森芳雄	5-6
		囲炉裏	福田豊四郎	6
		挿絵：いろり　福田豊四郎　作		6
		一・二月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.50	昭和30年2月15日	展覧会雑感	高田誠	1-2
		水彩界の元老　赤城泰舒氏逝く		2
		愛知県立の美術館　2月1日に開館		2
		近代画家の教室（5）　ヴァン・ゴッホ	霜田静志	3-4
		図版：吊橋　ゴッホ		3
		図版：矢車草をくわえた人　ゴッホ		4
		石井柏亭の個展　ニューヨークで		4
		美術講座　名作絵巻物について（1）	服部有恒	5-6
		図版：鳥獣戯画巻（甲号部分）		5
		美術界レポート		6
		二・三月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.51	昭和30年3月15日	生活と彫刻	藤野舜正	1-2
		香取秀真氏の銅像　計画進む		2
		人形の研究40年　西沢笛畝の記念会		2
		近代画家の教室（6）　オーギュスト・ルノアール	霜田静志	3-4
		図版：水浴の女		3
		図版：積木を遊べるココ		4
		美術界レポート		4
		新築された名古屋美術館を見て	早川雅晴	5
		写真：名古屋美術館の全景		5
		都美術館懇談会　別館建設の声しきり		6
		新興美術院の研究所　盛んだった開所式		6
		日比谷図書館新築		6
		日本美術院の回顧展　上野松坂屋で		7
		告知板［新制作協会、三軌会］		7
		三・四月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.52	昭和30年4月15日	「近頃の絵は解らない」ということについて	川口軌外	1-2
		田崎広助氏の画集出版を祝う		2
		平賀［亀祐］氏母国訪問　パリの壁の詩人		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		東京都美術館三十周年記念　5月11日		2
		完備しつつある蛍光灯　都美術館正面にも		2
		近代画家の教室（7）　アンリ・マティス	霜田静志	3-4
		図版：赤い背景の若い娘		3
		図版：貝のある静物		4
		新世紀美術協会結成		4
		美術講座　名作絵巻物について（2）	服部有恒	5-6
		図版：源氏物語絵巻の一部		5
		個人消息		6
		美術界レポート		7
		四・五月の展覧会［団体展スケジュール］		8
No.53	昭和30年5月15日	東京都美術館開館30周年記念号　5月11日挙式　美術の興隆を祈る（祝辞）	松村謙三	1-2
		記念式次第		1
		祝賀会次第		1
		写真：記念式場の一部		1
		美術館の由来（祝辞）	朝倉文夫	2-10
		写真：祝辞を述べる朝倉氏		2
		写真：記念品を受ける佐藤与助氏		3
		写真：佳葉社中の演奏		5
		写真：佐藤さんの胸像にレイをかける		5
		写真：祝辞を述べる安井都知事		5
		写真：感謝状をうけた人たち（女子）		6
		写真：会場をうずめる来賓		6
		写真：祝辞をのべる高橋芸術院長		6
		写真：『島の千歳』をおどる町春草さん		6
		写真：祝辞をのべる松村文部大臣		7
		写真：祝宴		7
		写真：黒田節をおどる平川富太郎さん		7
		写真：流れるメロディ　松本弘楽団の演奏		8
		写真：リズムに合せて		8
		写真：いさましい「残月」伊藤華山さん		8
		写真：感謝状をうけた人たち（男子）		8
		写真：祝宴風景		9
		盛大だった祝典の模様		10
		横山大観氏　八十八のお祝い		11
		美術界レポート		11
		五・六月の展覧会［団体展スケジュール］		12
		個人消息		12
No.54	昭和30年6月15日	日曜画家の画室	寺中作雄	1-2
		写真：［寺中作雄氏］		1
		恩賜賞・芸術院賞　昭和29年度［名簿］		2
		恩地孝四郎氏逝く　日本版画界の巨匠		2
		武蔵野会の解散		2
		山崎朝雲氏を偲ぶ会		2
		美術界レポート		2
		近代画家の教室（8）　ジョルジュ・ブラック	霜田静志	3-4
		図版：西洋梨		3
		図版：コップとギター		4
		個人消息		4
		美術講座　名作絵巻物について（3）	服部有恒	5-6
		図版：ふきぬきの例（源氏物語鈴虫の巻より）		6
		白日会事務所変更		7
		六・七月の展覧会［団体展スケジュール］		8
No.55	昭和30年7月15日	館長に就任して	早川治平	1
		写真：祝賀会の館長（中央）		1
		新館長　就任の祝賀会		2
		写真：祝賀会の風景		2
		後援会理事会ひらく		2
		前館長杉山司七氏　後援会事務局長に		2
		近代画家の教室（9）　パブロ・ピカソ	霜田静志	3-4
		図版：牡鳥を抱く少女		3
		図版：アビニヨンの女		4
		美術界レポート		4
		本年度日展出品について		4
		第11回日展の審査員［名簿］		4
		夏の写生地	島野重之	5
		参与会　下半期借館割当決定す		5
		美術団体告知板［女流画家協会、創型会、朱葉会、新構造社、創造美術会、光風会］		6
		鈴木画伯ら三会員　新団体を結成		6
		個人消息		6
		七・八月の展覧会［団体展スケジュール］		8

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.56	昭和30年8月15日	石は天地の骨	谷信一	1-2
		写真：竜安寺の庭石		1
		平和祈念像の除幕式　北村西望作		2
		一陽会生る		2
		はなばなしく開く前衛書道　ニューヨークで［奎星会］		2
		双台社で石井柏亭氏の歓迎会		2
		日本生活協会　20周年記念		2
		近代画家の教室（10）　アンリ・ルソー	霜田静志	3-4
		図版：牧場		3
		図版：夢		4
		第11回日展の審査員（前号よりつづき）［名簿］		4
		美術界レポート		4
		随筆　立秋	小絲源太郎	5
		写真：二本杉原の椎の木		5
		美術団体　MEMO［現代美術協会、太平洋画会、朔日会、第一美術協会、太平洋画会、創元会、新世紀美術協会］		6
		学芸員の試験　今秋に		6
		関西博物館連盟の例会		7
		8・9月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.57	昭和30年9月15日	メキシコ美術の意義	野間清六	1-2
		美術懇話会の発足		2
		一陽会の発会披露		2
		第40回二科展の祝賀会		2
		みづえ50周年記念　美術出版社		2
		近代画家の教室（11）　ジョルジュ・ルオー	霜田静志	3-4
		図版：ミセレーレ		3
		図版：キリスト		4
		美術講座　名作絵巻物について（終回）	服部有恒	5
		図版：源氏物語絵巻（柏木）三図の内その二		5
		やきもの入学１	小川瓦木	6-7
		美術界レポート		7
		9・10月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
		新刊紹介		8
No.58	昭和30年10月15日	画の形象	小林巣居人	1
		写真：［小林巣居人氏］		1
		名誉都民に川合玉堂氏　都民の日に		2
		写真：表彰を受ける川合玉堂氏		2
		国体芸術競技　今年から		2
		日本版画のアメリカ進出　平塚・棟方・斎藤の三氏		2
		根津美術館の新築　開館のはこび		2
		みずえ50周年　招待会にぎわう		2
		近代画家の教室（12）　マルク・シャガール	霜田静志	3-4
		図版：わが妻へ		3
		図版：二重の顔の花嫁		4
		新画廊の紹介　日動画廊・サンケイ画廊・楪画廊		4
		都美術館　副館長きまる		4
		美術講座　やきもの入学２　粘土のえらび方とねり方	小川瓦木	5
		美術団体　MEMO［二科会、日本美術院、行動美術協会］		6
		美術界レポート		7
		都美術館参与会		7
		10・11月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.59	昭和30年11月15日	美術の単純化	大久保泰	1-2
		国立近代美術館　日本近代美術の歩み　美術講座		2
		第二回文化財保護強調週間　11月1日〜7日		2
		第4回全国美術館会議ひらく［大阪市立美術館］		2
		文化勲章にかがやく　前田青邨氏		2
		参与会ひらく　上半期使用割当て		2
		明治期の洋画　物故画家とその作品　高橋由一のこと	岡畏三郎	3-4
		図版：鮭		3
		美術界レポート		4
		本間美術館　井山武雄遺作展		4
		美術講座　やきもの入学３　粘土のえらび方とねり方（つづき）	小川瓦木	5-6
		愛媛文華館　明・清名画展　阿部コレクション		6
		11・12月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8
No.60	昭和30年12月15日	風土と美術	栗原信	1-2
		第8回勤労者美術展		2
		国立近代美術館　講演・映画・展覧会の開催		2
		大潮会展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		第7回年末連盟展		2
		第4回全国美術館会議終了		3
		都知事招待会［出席者名簿］		3
		借館団体懇談会開催		3
		美術館内従業員と懇談会開催		3
		天皇陛下日展へ御成り		4
		日展終了［受賞者名簿］		4
		写真：審査風景（洋画）		4
		写真：審査風景（彫刻）		4
		美術講座　やきもの入学４　窯の作り方、使い方	小川瓦木	5-6
		三岸節子滞仏作品展［兜屋画廊］		6
		美術界レポート		6
		美術団体MEMO［新制作協会、一水会、二紀会、独立美術協会、自由美術家協会］		7
		12・1月の展覧会［団体展スケジュール］		8
		個人消息		8

Introducing Materials Related to the Language Instrument, *Parole Singer* by Michi TANAKA and Jiro TAKAMATSU

Kazuhiko YOSHIZAKI

The Language Instrument, *Parole Singer*, created by the composer Michi Tanaka (1945-) and artist Jiro Takamatsu (1936-1998), was displayed in the 'Tokyo Art Meeting (III) Art & Music—Search for New Synesthesia' exhibition at the Museum of Contemporary Art Tokyo (October 27, 2012 – February 3, 2013). This was the first time in 38 years, since it was presented at *The Language Instruments* exhibition at the XEROX KNOWLEDGE-IN in 1974 that the work has been exhibited to the public. In the latest exhibition the work was displayed together with various related materials, such as design drawings by Jiro Takamatsu, manuscripts for *The Language Instruments* exhibition written by the poet and dramatist Shuji Terayama (1935-1983), and poster and flyer of the *The Language Instruments* exhibition designed by the graphic designer Kohei Sugiura (1932-).

The object of this essay is to introduce the materials related to the Language Instrument, *Parole Singer,* in further detail. The original concept for the Language Instrument, *Parole Singer*, was proposed by Tanaka, with Takamatsu producing the formative design for the instrument itself and the accompanying chair. The *Parole Singer* is an instrument that "can create music from poems, weather forecasts, addresses, names, or any other text," it is 'an automatic composition machine that translates representational symbols–ecriture–into sounds "[1]. Instead of a piano keyboard, it is fitted with a typewriter-like keyboard that is used to type words, above which there is also an electronic display. As each letter is typed, the sound attributed to it is played through the loudspeaker while the letter itself appears on the display. This instrument plays 32 notes within an octave, the reason being that Tanaka felt limited by the prevailing twelve-note octave that is considered standard, so using the pythagorean scale and just intonation as a base, he added seven harmonic overtones to create a scale consisting of 32 notes.

Takamatsu's design, Terayama's handwritten notes, for *The Language Instruments* exhibition a poster for *The Language Instruments* exhibition, leaflets and other materials demonstrate that not only was this work revolutionary as a musical instrument, but it also resulted in the collaboration of numerous artists from this period who were all active in different fields and can be regarded as an important example of a 1970s' cross-disciplinary collaboration. For example, in addition to Takamatsu and Terayama, other artists involved include the graphic designer, Sugiura who produced the poster and leaflets for *The Language Instruments* exhibition, the poet Shuntaro Tanikawa (1931-) who appeared in the exhibition as a guest performer, as did the pianist Aki Takahashi (1945), the filmmaker and ex-member of the Tenjo Sajiki, (a theater troupe led by Terayama), Sakumi Hagiwara (1946-), the children's literature writer, Erika Tachihara (1937-) etc. This fact demonstrates that not only does the *Parole Singer* stand on the borderline between the fields of music and art but it is also relevant as a critique within the fields of literature and linguistics.

In addition to the aforementioned materials, we received an e-mail from Tanaka, on January 29, 2013, containing an essay entitled 'The Birth of the Language Instrument.' We are taking this opportunity to present the full text of this as it includes a description of the basic concept behind its creation, written by the artist herself, as well as other valuable information concerning the process by which it was brought into being.

[1]
Michi Tanaka, *tanaka michi : catalogue of works*, Tokyo : Shitsumon-sha, 1977, p.7

Related Program for 'MOT Collection: Chronicle 1964- | OFF MUSEUM'
Transcription of 'Mieko SHIOMI's Talk and Performance: Intermedia / Transmedia — The Technique Linking Diverse Works'

This program was presented on April 29, in connection with the 'MOT Collection: Chronicle 1964- | OFF MUSEUM' exhibition that was the initial section of the permanent exhibition for fiscal year 2012. The first half consisted of a talk by the artist, Mieko Shiomi, and the second half of a performance. The works presented were *Disappearing Music for Face/Version 2012*, *Disappearing Music for Face + Boundary Music/2012–Dedicated to George Maciunas*, *Water Music/Version 2012*, *Direction Event/Version 2012*. The musical performances were carried out by Hiroaki Ooi, Reki Shibata, Tomoko Fukui, Keitetsu Murai, Reiko Yano, Misako Yarita and volunteers from the audience.
The following text has been adapted from the notes Shiomi used and the transcription of for her talk:

The overall title of this program is 'Intermedia/Transmedia' but the main point of the talk is 'Transmedia.' What this means is that one concept can be used as a key to create consecutive works in different media.
Today, the word 'media' on its own is often used in reference to the mass media, but in the 1960s, when Dick Higgins of Fluxus put forward the concept of 'Intermedia' and defined it as being 'a form of expression that exists between established genres,' the term 'media' was taken to mean an area of artistic expression such as music, words, light, objects, images, etc. At the time I considered all the media laid out before me as being of equal value and the experience of 'Intermedia' provided me with the foundation to move on to 'Transmedia.'
Of all my works, the oldest example of 'Transmedia' is *Disappearing Music for Face*. This originated from a work for a 1964 event based on an idea by George Maciunas in which a performance by Yoko Ono was recorded by Peter Moore on 8mm film, then used to create a flipbook, which I later transformed into a choral work in 2002. On the other hand, the most recent example is *Endless Box*. This was initially created in 1963; it represents the attenuation of sound in the form of an object and was used first in a performance, then in 2011 in a video work. In addition to these, I have enjoyed transforming and developing various other works, including *Water Music*, *Balance Poem*, *An Incidental Story on the Day of a Solar Eclipse*, *An Incidental Story on the Night of a Lunar Eclipse*, and *Direction Event*. For this program, I have presented a 2012 version of a performance, involving performers and volunteers as a new experiment in 'Transmedia.'

A Brief Commentary on the Creation of the Video *Endless Box*

Aki FUJII

In fiscal year 2009, the Museum of Contemporary Art Tokyo obtained 31 works by Mieko Shiomi for its collection. In all of these works music, words and visual elements combine harmoniously, not only containing aspects of 'Intermedia', allowing them to cross between different genres, but also creating a single whole within which each can be converted in to the other. Some of them represent what the artist describes as 'Transmedia', by which she means the same concept used in a work produced in one medium being recreated as a new work in a different medium. For this reason it Shiomi's works cannot be said to represent a finished world, encapsulated within a single 'object', rather they always possess the potential of transition and change.

These works were introduced under the theme 'Chronicle 1964- | OFF MUSEUM' as part of the Museum's 'MOT Collection' permanent exhibition (February 4 — May 6, 2012). However, for this exhibition, works in which this concept has been expressed visually were presented inside a glass case, giving rise to the dilemma that their inherent dynamism could not be adequately transmitted. In an effort to overcome this problem, I arranged for a talk by the artist (included in the previous section), performances based on her works, and the production of a video featuring her *Endless Box*.

Conceived in 1963, *Endless Box* consists of 34 paper boxes that become progressively smaller, all of them nesting inside each other. Shiomi refers to this work as 'a visual diminuendo', and it is a work that allows us to experience the duration of time through a physical form. In order to emphasize the temporal element, as well as allowing the viewers to relive the experience of an imaginary music for themselves, I suggested that Shiomi create a video performance of herself interacting with the work that could be displayed together with the boxes. However, although Shiomi agreed to produce the video, she thought that it would be better if an anonymous performer were used, as this would make the work autonomous, and from the viewpoint of 'Transmedia', it would be preferable to produce the video as a new work. The result was that acting on Shiomi's idea; I assumed the role of performer while the artist, Daisuke Yamashiro, handled the filming to create a visual work.

Shiomi's creativity starts from small beginnings but she does not let it conclude there, instead she transfers it, continuing the linked images to produce something 'endless'.

In museums, numerous people contribute to accumulate and exhibit the works to form collection, together weaving a history for the future, and it is therefore necessary to look carefully at the time included in each individual work and the history that will accumulate there in the future.

Comprehensive Table of Contents (1) for the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* (Published by Tokyo Metropolitan Art Museum)

Edited by: Naho HASEGAWA

The *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* was the serial publication produced by the Tokyo Metropolitan Art Museum, the 1st issue being published in January 1951 and continuing through to the 450th issue in March 1997.

Originally a paid journal up until the 123rd edition (March 1961), the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* was published by a group of art aficionados who formed a 'Tomo no Kai' (association for the Friends of the Museum), and it provided information on trends in the art world as well as introducing the activities of the museum. However from the 124th edition (April 1961), the Tokyo Metropolitan Government provided the budget for its publication and it was distributed free as the museum's P.R. journal.

From 1964 the Tokyo Metropolitan Art Museum began to publish the *Handbook of Tokyo Metropolitan Art Museum*, but the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* continued to be published regularly, providing information on the numbers of visitors to each exhibition and describing works that had been donated to the museum, assuming the role of an annual report or bulletin and providing valuable information.

MOT's Art Library contains every edition of the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum*. Unfortunately, there is no comprehensive table of contents available and access to the contents of articles remains inadequate. The activities of the Tokyo Metropolitan Art Museum were so closely linked to the developments of Japanese art and Japanese art organizations in the postwar era, it has been decided that a comprehensive table of contents should be compiled and this will be published as it becomes available in order to improve accessibility for research. The first step in this project is now complete and we are releasing a table of contents for issues 1 (January 1951) through to 60 (December 1955).

Notes:

- This is a comprehensive table of contents for all the issues of *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* from the first issue (January 1951) to the sixtieth (December 1955).
- This table of contents was compiled based on the headings within the original publications and where this was insufficient, appropriate additions were extracted from the contents of the articles.
- Where a section was not included in the original table of contents this has been added to the new index, the heading and writer's name being presented inside square brackets [ ].
- Information relating to plates and photographs has been added where considered necessary.
- In the case of illustrations, only those that originally included a title and artist's name have been listed.

平成24年度 東京都現代美術館年報
研究紀要 第15号

平成25年3月31日発行

編集・発行
公益財団法人　東京都歴史文化財団
東京都現代美術館
〒135-0022　東京都江東区三好4-1-1　電話03-5245-4111

製作
株式会社オノウエ印刷